

古事記のものがたり

kojiki no monogatari

小林 晴明
宮崎 みどり



稗田阿礼が語る

ひえだのあれ

かた

ゆかいな

にほん

しんわ

「日本の神話」



サン・グリーン出版

古事記のものがたり

kojiki no monogatari

小林 晴明
宮崎 みどり



ひえだのあれ
稗田阿礼が語る

ゆかいな

「日本の神話」



サン・グリーン出版

古^こ事^じ記^きのものがたり

もくじ

第一話
第二話
第三話
第四話
第五話
第六話
第七話
第八話
第九話
第十話
第十一話
第十二話
第十三話
第十四話
第十五話
第十六話

創世の神々と高天原……………	九
よいしよ、こらしよ……………	十三
いざなぎ・いざなみ……………	二一
涙から生まれた神さま……………	二九
黄泉の国（死者の国）……………	三九
黄泉つ軍との戦い……………	四七
両目と鼻から生まれた尊い神……………	五七
暴れ者の須佐之男……………	六五
天の安河（天の川）でのうけひ……………	七三
天の岩戸開き……………	八三
尻に大豆、ほと（女陰）に麦……………	九一
八俣の大蛇（おろち）退治……………	九九
八雲立つ出雲……………	一〇七
いなばの白兔……………	一一五
赤い猪……………	一二一
木の国から根の国へ……………	一二九

第十七話	蛇、蜂、ムカデの室……………	一三七
第十八話	死者の国からの脱出……………	一四五
第十九話	すせり姫の嫉妬……………	一五三
第二十話	光る船に乗ってきた小さな神……………	一六一
第二十一話	高天原からの使者……………	一六九
第二十二話	キジの鳴女……………	一七七
第二十三話	空とぶ船……………	一八五
第二十四話	国ゆずり……………	一九三
第二十五話	天孫降臨……………	二〇一
第二十六話	猿田彦とあめのうずめ……………	二〇九
第二十七話	木花之佐久夜姫と石長姫……………	二一七
第二十八話	火中出産……………	二二五
第二十九話	海幸彦と山幸彦……………	二三三
第三十話	龍宮城……………	二四一
第三十一話	塩みつ玉・塩ふる玉……………	二四七
第三十二話	豊玉姫とわに鮫……………	二五七
あとがき		

古事記のものがたり

稗田の阿礼が語る
ゆかいな「日本の神話」



著者

小林 晴明
宮崎 みどり

イラスト

小林 あきら
荒木 尚美

ん？

わたくしですか？

わたしは稗田ひえだの阿礼あれと申すものでございます。

一三〇〇年ほどまえに朝廷ちやうていに召し出だされて、わたしが聞き覚えて
おりました神話しんわを、太安万侶おののやすまろに語かたったことがあります。安万侶は、
わたしの話はなしを『古事記』ふることぶみという書物しよもつに編あみ、後の世のちよに伝つたえると申し
ておりました。

『古事記』ふることぶみには、この宇宙うちゆうの始はじまりや日本にほんの国くにの始はじまり、神々かみがみの
歴史れきしや日本人にほんじんの自然観しぜんかん、風習ふうしゆなど、わたしたちの祖先そせんが語かたり伝つたえて
きた大切な物語ものがたりが書かかれております。ところが、その『古事記』ふることぶみ
が今いまの日本にほんの人々ひとびとにまったく伝つたわっていないうえに、忘れ去わすれられよ
うとしております。

ああ、わたしは悲^{かな}しい。

それを、いま一度^{いちど}語^{かた}りついでもらいたくこの世^よに現^{あらわ}れてきたので
ございます。

わたくし阿^あ礼^れが、全^{ぜん}身^{しん}全^{ぜん}霊^{れい}をもつてこの「日^に本^{ほん}の神^{しん}話^わ」を語^{かた}らせ
ていただきます^{おも}います。

ま^{そう}ずは創^{せい}世^{せい}の神^{かみ}々^{がみ}のお話^{はなし}です。ではでは。



第一話 だいいちわ

創世の神々と高天原 そうせい かみがみ たかあまはら

ふることに伝う。つた

この世界のはじまりは、天も無く、地も無く、時間も空間もない。せかい
有るのか無いのかもわからない。あ な
混ざりあっているようで、混ざつてもいない。ま
ただただうす暗く、もやもやとした状態が果てしなく。じようたい
どこまでも広がっているのです。呼び名もまだありません。ひろ

そのとき、天の中心から、てん ちゆうしん

「た・か・あ・ま・は・ら（高天原）」たかあまはら



と呼ぶ声こえが聞きこえたように思おもわれました。すると、天てんと地ちが分わかれだし、たくさんちいの小さな光ひかりの粒つぶがここの世界せかいに現あらわれたのです。

あめのみなかぬし（天あめ之御中主のみなかぬし）の神かみでした。

宇宙うちゅうの心こころそのものであるこの神様かみさまは、あらゆるところに満みちあふれておられたために、誰だれもその姿すがた、形かたちをとらせることができません。

そのつぎに、天てんからくるくる回かいてん転しながら、

たかみむすひ（高皇産巢日たかみむすひ）の神かみが現あらわれました。

つぎに、地ちから同じように回まわりながら現あらわれたのは、

かむみむすひ（神皇産巢日かむみむすひ）の神かみでした。

この二柱ふたはしらの神々かみがみもやはり姿すがた、形かたちが見えないのでした。

宇宙うちゅうの始はじまりでございます。

このあと、たくさんかみさまの神様かみさまたちがお生うまれになります、そのお

話はなしはまたこの次つぎに。

神主 御 天

かゝることには、この世界の始まりは、天もなく地もなく、時間も
空間もない。あるかないのやむゆかしな。まやかしやういふてゐる。

ようで、まやかしもない。ただただうすぐらくもやましく

したじやうたいが、はてしなくどこまでもひろがって、

でした。神が、もまだありません

そのとき、天の中心から

たかあまはら

とあまのこが、きこえたよ

うにおもわれしました

すると、天と地がわかれ

だしたくさんの

ちいさな光のついで

この世が、にあらわれたので

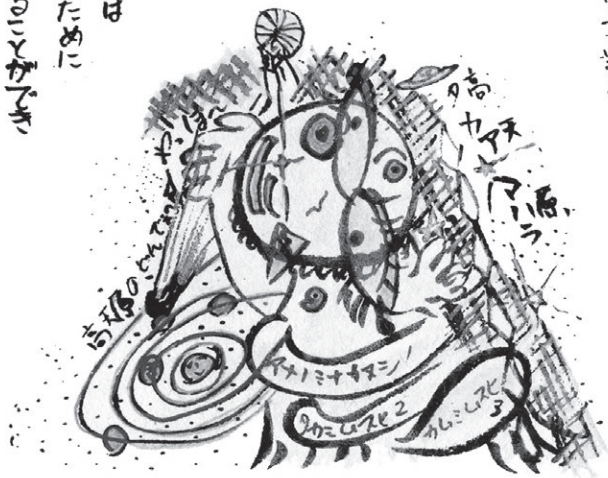
あめのみなが、ののかが、でした

うしろのこころ、そのものであつたのかみ、

あらゆるところに、みちあひ、れておられたために

だれも、そのすがた、かたちを、とらえることが、でき

ません。このあしたくさんのかみ、まが、あうまれに、なつたが、



第二話^{だいにわ}

よいしょ、こらしよ

ふることに伝^{つた}う。

あめのみなかぬし^{あめのみなかぬし}（天之御中主）

たかみむすひ^{たかみむすひ}（高皇産巢日）

かむみむすひ^{かむみむすひ}（神皇産巢日）

の三柱^{みはしら}の神々^{かみがみ}『造化三神^{ぞうかさんじん}』たちによつて、宇宙^{うちゅう}は始^{はじ}まりましたが、

油^{あぶら}のようにどろどろとしてまだしつかりと固^{かた}まっておりません。ま

るで水^{みず}の上に浮^ういた脂^{あぶら}のような状態^{じょうたい}に見^みえます。海月^{くらげ}のようにゆら

ゆらと漂^{ただよ}っているようにも思^{おも}われます。そんな泥沼^{どろぬま}のような中^{なか}から、



美しい若芽が萌えるようにしてお生まれになった神様がおられます。

うましあしかびひこち（宇摩志阿斯訶備比古遲）の神と申しまして、すべての命の素となる神様でございます。（糺・カビ・菌）
つぎに、あめのとこたち（天之常立）の神がお生まれになられ、

「よいしょ」

と担ぐように、はるか高くまで天を押し広げ支え挙げました。この二柱の神様たちもやはり姿は見えません。

あめのみなかぬし（あめのみなかぬし）（天之御中主）

たかみむすひ（たかみむすひ）（高皇産巢日）

かむみむすひ（かむみむすひ）（神皇産巢日）

うましあしかびひこち（うましあしかびひこち）（宇摩志阿斯訶備比古遲）

あめのとこたち（あめのとこたち）（天之常立）

ここまでの五柱の神様たちは『別天つ神』という特別な神々で、

男おとこでもなく女おんなでもない独り神ひとがみです。

大宇宙だいうちゅうは、今いまでもこの目めに見えない神様かみさまたちによつて支配しはい統一とういつされていゝるのです。見えるものよりも、見えないものがこの世界せかいを動うごかしているのです。

つぎに、くにとこたち（国くに之常立とこたち）の神かみがお生まれになり、地ちが永遠えいゑんに揺ゆらがないように、

「こうしよ」

とどつしり座すわり込み、大地だいちを守まもりました。

こうして豊ゆたかな天てんと強固きやうこな大地だいちが完成かんせいし、はてしのない広々ひろびろとした宇宙空間うちゅうくうかんができあがつたのです。

つぎに、とよくもの（豊雲野とよくもの）神かみがお生まれになり、真まつ白しろなふわふわしたいくつもの星雲せいうんに姿すがたを変かえました。この二柱ふたはしらの神様かみさまたちもやはり独り神ひとがみで性別せいべつはなく、姿すがたは見えないのでした。

ここにおいて大宇宙だいうちゅうはようやく姿すがた、形を整え始めました。そしてこのあとからは神様かみさまにも性別せいべつができ、男おとこと女おんなの神様が次々と生まれてきました。

まず、ういぢに（宇比地邇ういちに）、妻のすいちに（須比智邇すいちに）のご夫婦ふうふが現れて、泥どろや砂すなをお産うみになりました。その泥どろや砂すなを丸めて宇宙うちゅうに漂ただよっている星雲せいうんに投げ、星々ほしほしの種たねを造りました。

つぎに、つのぐひ（角杙つのぐひ）、妻のいくぐひ（活杙いくぐひ）のご夫婦ふうふが現れて、その泥どろや砂すなが他の星雲せいうんに飛び出さないように杙くいを産うんで柵さくを造つくていきました。

つぎに、おほとのぢ（意富斗野地おほとのぢ）、妻のおほとのべ（大斗乃弁おほとのべ）のご夫婦ふうふが現れて、星雲せいうんと星雲せいうんの境界きょうがいを管理かんりするために、門もんや戸とを産うんで出入り口でいぐちを守まもりました。

つぎに、おもだる（於母陀流おもだる）、妻のあやかしこね（阿夜訶古泥あやかしこね）のご夫婦ふうふが現れて、あらゆるものの陰陽いんよう（男根だんこんと女陰じょいん）をつかさどり、

生産と豊饒の管理をしました。

そしていよいよつぎに登場するのが、日本人のご先祖となられる、

いざなぎ（伊耶那岐）、

いざなみ（伊耶那美）

のご夫婦の神様なのです。

なんだか神様の名前が多くてややこしいことですが、国之常立の

神から伊耶那美の神までは『神世七代』と言って『高天原』の誕生

にとっても重要なお役目を果たされた神々でございます。以上で十七

柱の大切な神々が誕生されたことになります。

ひと息で話しましたが、ここまでは百五十億年という気の遠く

るような長い長い年月が流れて、ようやくたどりついたお話しです。

そうそう、神様を数えるのは、にん（人）ではなくて、一柱（ひ

とはしら）二柱（ふたはしら）と言って数えます。なにか変ですが

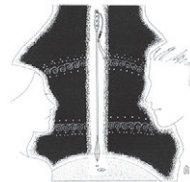
昔からこのように言っているのです。

それから、強固な大地を守り固めるお役目の国之常立の神ですが、この神さまは、天から降ってきた山と万葉集に歌われている奈良県明日香の天の香具山の山頂と、元出雲大神宮の奥津城の岩座、和歌山県の秘境、玉置神社に祀られています。

では、いよいよ次から、日本の国生みがはじまりますが、そのお話はまたこの次に。

第三話
だいさんわ

いざなぎ・いざなみ



ふることに伝う。

ある日、高天原にお住まいになられている神々が全員集まり、はるか下界を見降ろしながら会議を開かれました。そして、いざなぎの神、いざなみの神、のご夫婦をお呼びになり、玉飾りのある美しい『天の沼矛』を渡し、

「あの泥海のようにただよえる国を整え固めよ」

と命じられたのでございます。

二人は天の沼矛を手を持ち、高天原と下界をつなぐ『天の浮橋』

の上から、どろどろとした海原を見下ろしました。

そして天の沼矛を降ろしてゆつくりとかき回しました。

♪こをろ。

♪こをろ。

そんな不思議な音が聞こえてきます。

そこで、さつと矛を引き上げました。すると、矛の先から塩のしずくがぽたぽたとしたたり、積もり固まり、やがて塩の球となりました。

この球はおのずからころころところがっているので『おのころ嶋』と名づけられました。地球の誕生でございます。

わたしたちのご先祖は、数十億年も前から、すでに地球が自転していることや塩の固まりであることを知っておられたのでございます。

二人はさつそく出来たばかりの『おのころ嶋』に降りていき、まず最初に『天の御柱』を立てました。天の御柱とは、神霊が昇り降

りするために立てるととても太くて高い柱で、大地と宇宙を結ぶ大切な役目をしています。そしてそれは、地球のどこからでも見る事ができます。

つぎに『八尋殿』という広い宮殿を建てました。

こうして新居もできあがりひと息ついたところで、いざなぎの命は、自分自身の下半身に何か不思議なものが、ふらんふらんとぶら下がっているのが氣になり、

「おまえの体はどんな風になっているのか？」

といざなぎの命にお尋ねになりました。いざなぎは、しげしげと体を眺めて答えました。

「わたしの体はほとんど完成しているのですが、一か所だけ、ぺこん、とくぼんだ『なりなりて成り合わない』ところがあります」

「わたしの体にも一か所だけ、ぽこん、と飛び出た『なりなりて成り余れる』ところがある。そこでどうだろう、お前のくぼんだところに、わたしのとびでたところを差し入れて、国を産もうと思うが、

いかに？」

と申もうされました。

「はい。そうしましょう」

といざなみは、にこにこ笑わらって答こたえられました。

「では、新あたしい魂たましいを宇宙うちゅうからいただくために、天あめの御柱みはしらの周まわりを廻まわろう」

そして、いざなぎは左ひだりから、いざなみは右みぎから回まわり、二ふた人が出で会あったところで先さきにいざなみが、

「あなにやし、えをとこを（ああ、なんとええおとこ！）」

あとからいざなぎが、

「あなにやし、えをとめを（ああ、なんとええおとめ！）」

と見みつめ合あいました。

言こと霊たまといつて言こと葉はには不ふ思し議ぎな靈れい力りよくが宿やどつております。いい言こと葉はを使つかえば幸しあせになり、悪わるい言こと葉はを使つかえば不ふ幸こうになっていくのです。

そこで二人は、国を産むにあたってお互いをほめたたえる言葉をかけあったのでございます。

このとき、いざなぎは、

「女の方から先に声をかけたのは良くないのでは？」

とつぶやいたのですが、あまり氣にもとめないで、宮殿の奥にある寢室へと入られ、男女の営みである『みとのまぐはひ』をされました。

やがて、いざなぎは骨のない『水蛭子』をお産みになりました。二人は泣き悲しみながら、この子どもを葦舟に乗せて流し去りました。つぎに『泡嶋』が産まれましたが、やはり、泡のように浮かび漂うばかりで人の形にはなりませんでした。

いい言霊を使ったのにどうしてこのようなことになったのでございましょうか、お二人は神々にご相談するために、ひとまず高天原に帰ることとなりました。

ところで、高天原に現れたご夫婦の、いざなぎの神・いざなみの神ですが、「二人で国を生む」という重大な使命を与えられてからは、お互いに「いざなぎの命・いざなみの命」と呼び名が「神」から「命」に変わり、下界に降りて来てお働きになられたのでございます。

私たちもそれぞれ使命（氏名）を帯びて世の中に誕生し働いているのです。名前には「命」が吹き込まれているということをよくよく理解して、ひとりひとりの「命」を大切にしてくださいね。

さて、高天原に帰られたお二人の命たち、このあと一体どうなっていくのでしょうか。このお話はまたこの次に。

伊耶那岐神
伊耶那美神

ナント

イイオトコ

『あなにゆし えをとこを』

ナント

ユエオシナ

『あなにやし えをとめを』

伊耶那岐
伊耶那美

は
声
を
か
け
合
い

柱のまわりを回りました。

すると大きな川の
鳴がでま
した。



第四話 だいよんわ

涙 なみだ から生まれた神 かみ さま



ふることに伝 つた う。

「私 わたし たちの産 う んだ子供 こども たちはよくありません。いったいどうすれば
うまく国 くに を産 う むことができるのでしょうか？」

いざなぎといざなみのご相談 そうだん にたいして高天原 たかあまはら の神々 かみがみ は『ふとま
に』で占 うら いをすることにいたしました。鹿 しか の肩骨 かたほね や亀 かめ のこうらを焼 や
き、そのひび割 わ れのぐあいによつて答 こた えを知るのです。

その結果 けつ 「女 おんな から先 さき に声 こえ をかけたのが良 よ くない」という答 こた えが出 で
たので「改 あらた めてやり直 なお すように」と伝 つた えられました。

ふたり
二人はおのころ嶋に帰ると、前と同じように男のいざなぎは左廻りに、女のいざなみは右廻りに、左右に分かれて『天の御柱』を廻り、こんどは男のいざなぎから、

「あなにやし えをとめを」

つづいて、女のいざなみが、

「あなにやし えをとこを」

と言霊をかけ合い『みとのまぐはひ』をされました。すると、どうでしょう。つぎからつぎにりっぱな国が産まれはじめたのでございます。

最初に、淡路島（淡道之穂之狭別）が産まれ産声をあげました。二番目に、体がひとつで顔が四つある四国。

伊予（愛比売）

讃岐（飯依比古）

阿波（大宜都比売）

土佐（建依別）

三番目に、三つ子の隠岐の島。（天之忍許呂別）

四番目に、これもまた体がひとつで顔が四つある九州。

筑紫（白日別）

豊（豊日別）

肥（建日向日豊久士比泥別）

熊曾（建日別）

五番目に、壱岐の島。（天比登都柱）

六番目に、対島。（天之狭手依比売）

七番目に、佐渡の島。

最後に、本州である大倭豊秋津嶋。

これらの八つの嶋をまず産みましたので、日本のことを『大八嶋国』ともいうのです。また『秋津』とはトンボの古名で、トンボが交尾をしながら飛んでいる姿が本州に似ていることからついた名前なのでございます。

そのあとまだまだ産うまれます。

吉備きびの児島こじま、小豆島しょうどしま、大島おおしま、姫島ひめしま、五島列島ごとうれつとう、双子ふたごの島しま。これらは瀬戸内海せとないかいや九州きゅうしゅうにある六つむつの小さな島々しまじまで、ここによく日本にほんの国土こくどを産うみ終おえました。

それが済すむとお二人ふたりは『大八嶋国おおやしまくに』に住すむ神様かみさまを産うみ始めたのでございます。

土つちの神かみ。石いしの神かみ。岩いわの神かみ。家いえの神かみ。海うみの神かみ。おわだつみ。川かわの神かみ。泡あわの神かみ。波なみの神かみ。ザブンザブン。水みずの神かみ。風かぜの神かみ。ヒューヒュー。木きの神かみ。おおよびこ。山やまの神かみ。おおよまつみ。野のの神かみ。かやの姫ひめ。

阿礼あれはちよつと疲つかれてきました、少し休やすみましよう…。

霧きりの神かみ。山頂さんちようの神かみ。谷たにの神かみ。暗闇くらやみの神かみ。迷まよいの神かみ。ウロウロ。天あめの鳥船とりふねの神かみ。スイスイ、フワフワ、空そらも飛とべるよ。食たべ物の神かみ。おおげつ姫ひめ、パクパク。

とまあこんなぐあいにたくさん産うみ、その子こどもたちもつぎつぎ

と子を産んで、野山には花が咲き、雨が降り、虫が鳴き、雪が降り、四季もめぐりめぐって日本はたいそうにぎやかになってまいりました。山や海、石や木や草花、そのひとつひとつに神様が宿つていたのです。

このように、いざなぎ（男）が先に声をかけ、いざなみ（女）をいざなう（誘う）ということわり（天の理）が、高天原の神々の占いで決まりましたので、以来、それに習つて鳥や魚、動物などのいろいろな生き物たちは、男の方から一生懸命女性を誘うようになりました。

さて、お二人はここまでとても順調にお産みになつておりました。が、つづいて火の神『かぐ土』を産んだ、いざなみに大変なことが起こりました。

火の神である『かぐ土』の強い炎に焼かれて、みほと（女陰）に大やけどを負い寝込んでしまったのです。そして、嘔吐し、大小便

をたれ流ながしました。すると、そのゲロ、便べん、尿にようからも神様かみさまが産うまれました。

ゲロからは、鉾山こうざんの夫婦神めおとがみ『金山彦かなやまひこ』『金山姫かなやまひめ』。
便べんからは、粘土ねんどの夫婦神めおとがみ『埴はにやす彦ひこ』『埴はにやす姫ひめ』。

尿にようからは、水みずの神かみ『みづはの女め』と穀物こくもつの霊れい『わくむすひ』。

このわくむすひの娘むすめが、お伊勢いせさんの外宮げくうに祀まつられている『豊受氣比売とようけひめ』で、日本中にほんじゅうの穀類こくるいが豊ゆたかに実みのるようにと守まもっておられる神様かみさまです。

こうして、高天原たかあまはらの神々かみがみのご命令めいれいを受けて日本にほんの国産くにうみをされていた、いざなぎ、いざなみですが、これまでお二人ふたりで力ちからを合あわせて十四じゅうよんの島々しまじまと三五柱さんじゆうちうの神々かみがみを産うんでいます。

さて、いざなみの容体ようたいですが、いっこうに治なおる氣配けはいがありません。そればかりか心臓しんぞうの鼓動こどうがしだいしだいに弱々よわよわしくなり、ますます衰弱すいじやくされていったのです。いざなぎは一睡いっすいもせず、妻つまに付つきつきり

で看病かんびようをしましたが、ついにその音おとも消きえてしまいました。

一瞬いつしゆん静寂せいじやくがおとずれました。

「おお、なんとということだ。ひとりの子この命いのちとひきかえに、愛いとしい

お前まえを失うしなうなんて……」

その声こえとほぼ同時どうじに森もりがざわめき大地だいちが唸うなりりました。

いざなぎは嘆なげき悲かなしみ、まだほんのりと温あたたかい妻つまの枕元まくらもとに這はいま

わり、足下あしもとに取りすがって泣なき続つづけました。冷つめたく冷つめたくなるまで

そうしていました。するとその涙なみだから『泣沢女なきざわめ』という、もの静しずか

で美うつくしい神様かみさまがお生うまれになったのです。

この神様かみさまは大和やまとの国くに（奈良なら県けん）の天あめの香久山かぐやまの麓ふもと『泣沢なきざわの森もり』に

鎮しずまっておられます。この森もりの中なかを歩あるくとき、雨あめでもないのに冷つめた

いしずくが落おちてくることがあると伝つたえられておりますのは、きつ

といざなぎの涙なみだなのでございましょう。

さて、いざなぎの亡なきからは、出雲いずもの国くに（島根しまね県けん）と伯耆ほうきの国くに

(広島県)の境にある比婆の山に埋められました。また、熊野市(三重県)にある花の岩窟にもいざなみは祀られております。

さて、妻を墓に葬つてもいざなぎは、泣き続けました。泣けば泣くほど、想いは深く、寂しさはつのるばかりです。

目の前には火の神かぐ土が、母の死も知らずに、より一層炎を燃え立たせて元氣に飛び回っています。

いざなぎはすつくと立ち上がるやいなや、腰に付けていた、『あめのをははり』という名の十拳劔(一拳は握りこぶしひとつ)に手をかけ、一瞬のうちに息子の首を切つてしまわれました。

さあ、大変なことになってしまいました。このお話はまたこの次に。

火之迦具土神

ぼくは人の神様です。

母さん(イザナミ神)のお股から産ま
れました。ぼくのせいで母さんは
大火傷して死んでしまっ

黄泉という国
へ送られました。

お父さん(イザナミ神)は

かんかんになつて、ぼくの首を剣
で切っちゃいました。

ぶんじという音が耳にのこっています。

それから
ぼくの血は剣や龍になりました。



第五話^{だいにごわ}

黄泉^{よみ}の国^{くに}（死者^{ししや}の国^{くに}）



ふることに伝^{つた}う。

「布都^{ふつ}！（フツッ！）」

にぶい刀音^{かたなおん}が不氣味^{ぶきみ}に響^{ひび}きわたりました。

刀^{かたな}には『布都^{ふつ}の御魂^{みたま}』という神霊^{しんれい}が宿^{やど}っています。だから、ものを斬^きるときには「フツッ」とか「ブツッ」とか「プツ」と聞こえるのでございます。

いざなぎが切り落^おとした火^ひの神^{かみ}かぐ土^{つち}の首^{くび}は、炎^{ほのお}をあげながらく

るくると宙に舞いました。あたり一面、吹き出した血で真っ赤に染まり、十拳釵にはぼたぼたと鮮血がしたたっています。まわりの岩にも血が飛び散っています。それらの血は、八柱の神へと変化しました。

まず、刀の切っ先についた血が岩にほとばしると、

いはさく（石析）、

ねさく（根析）、

いはつつのを（石筒の男）

の三柱の刀剣の神が産まれました。

つぎに、刀のつばについた血が岩にほとばしると、

みかはやひ（甕速日）、

ひはやひ（樋速日）、

たけみかづち（建御雷）

の三柱の雷の神が産まれました。

つぎに、刀の柄にあふれた血が、握っていた手指のあいだからし

たたり落ちると、

くらおかみ（闇淤加美、たかおかみ／高淤加美）

くらみつは（闇御津羽）

の二柱の雲や雨を呼ぶ龍の神が産まりました。この龍神は丹生川
かみじんじやかみしや
上神社上社（奈良県）に、また『布都の御魂』は
いそのかみじんくう
大和の国（奈良県）にある石上神宮に祀られているのでございます。

ころ殺された火の神の体からも神が姿を現しました。

あたま頭には正鹿山津見（まさかやまつみ）

むね胸には淤滕山津見（おどやまつみ）

はら腹には奥山津見（おくやまつみ）

だんこん男根には闇山津見（くらやまつみ）

ひだりて左手には志芸山津見（しぎやまつみ）

みぎて右手には羽山津見（はやまつみ）

ひだりあし左足には原山津見（はらやまつみ）

右足には戸山津見（とやまつみ）

全部で八柱の山の神々が産まれてきたのです。

余談ですが、八つ裂きというのはこの体の八つの部分をばらばらに切り離すことでございます。

さて、ひと騒動終わりますと、いざなぎは遠くの方を見つめ何か考えられている風でございました。そしてふと、

「いざなぎに会いたい」

と小さな声でつぶやかれたのです。

そこでいざなぎは、いざなぎを追って黄泉の国へ入っていきました。暗く、深く、冷たく、とても長い道のりでございます。

やがて、地の底、黄泉の国に着かれました。閉ざされた扉の前に立ちました。辺りはしんと静まりかえっています。いざなぎはその扉に向かって、静かに話されました。

「いざなぎ、むかえに来たよ。一緒に帰ろう」

声はとても小さかったのですが、神殿の中にいるいざなみの耳には、はつきりと聞こえておりました。しばらくして扉が開き、薄暗い中にも一層美しく見えるいざなみが姿を見せました。

「わたしはさみしくて仕方がない。それに、一緒に造ろうとした国は、まだ出来ていないだろ」

「愛しき夫よ。こんな処までよく訪ねて来てくださいました。けれどとても残念です。もう少し早くおいでくださら良かったです。すが……。わたしは、すでに黄泉の国の食べ物をお口にしましました（黄泉戸喫）。だから、二度と地上に戻れないのです。でもあなたのその懐かしいお顔、やさしい声を聞くと、とても帰りたく思います。そのことを黄泉の国の神に相談してきます。もしかすれば帰れるかもしれません。その間、決してわたしの姿を見ないと約束してくださいね」

そう言い残して奥へと入っていかれたのでございます。いざなぎは長い間、外で待つておりました。しかし、待てども待

てどもいざなみは戻もどつてきません。それでとうとう約束やくそくを破やぶつて中なかへと入はいつていったのです。

神しん殿でんの中なかは真まつ暗くらでした。

凍こりつくような冷れい氣きが漂ただよっています。いざなぎは左ひだりの髪かみに差さしていた魔まよけのくしを取り、その端はしの太ふとい齒はを一本いっぽんだけ折おつて『ひとつ火び』をともされました。

炎ほのおはあたりをゆらゆらと照てらし出だします。

「ぎよつ」

いざなぎは立ちたちすくみました。あらぬ物ものをそこで見みたのです。いったい何なにを見みたのでしょうか。このお話はなしはまたこの次つぎに。

予母都志許売

わたしは地下にある黄泉

の国に住んでいます。とても

暗い処です。死んだものが

来る国です。ここに

来たものは帰る

ことができません

大雷火雷黒雷析雷

若雷土雷鳴雷伏雷の八種の雷

の仲間がいます。みんなやましいです

竹の子は好きです

ぶどうは好きです

桃はちょっとにがてです



第六話 だいろくわ

黄泉つ軍との戦い よもぐんたたか

ふることに伝う。つた

闇に灯した『ひとつ火』のわずかな明かりの中に何か醜惡な塊やみともが見えます。よく見ると、それは腐乱したいざなみの死体でした。み体にはうじがたかり、ごろごろという氣味の悪い音をたてています。からだ

頭には大雷（おおいかづち）、胸には火雷（ほのいかづち）
腹には黒雷（くろいかづち）、女陰には析雷（さくいかづち）
左手には若雷（わかいかずち）、右手には土雷（つちいかづち）
あたたま おおいかづち むね ほのいかづち
はら くろいかづち ほと さくいかづち
ひだりて わかいかずち みぎて つちいかづち



左足には鳴雷（なるいかづち）、右足には伏雷（ふしいかづち）
全部で八種類の恐ろしい雷（いかづち）神が居たのでござい
す。

肝をつぶしたいざなぎは、恐怖におののき、一目散にもと来た道
を逃げ帰りました。

むかし、このようなことがありましたので、闇夜に『ひとつ火』
を灯すことはたいへん縁起が悪いということになったのでございま
す。みなさん、暗闇で灯をともすときには、魔物を見ないようにく
れぐれも氣をつけましょう。

さて、腐りかけの恥ずかしい姿を見られたいざなみは、逃げてい
くいざなぎに向かって、

「見るなと云うたに、なぜ見た！」

と怒り狂い、よもつしこめ（黄泉醜女）という醜惡な女にあとを
追わせました。

よもつ醜女しこめは、みるみるいざなぎに追おいついていきました。

いざなぎは、追おつてくるよもつ醜女しこめに向むかつて、髪かみをくくつていた黒くろいつる草くさをほどいて、エイツと力ちからいっぱい投げなつけました。つる草くさは地面じめんに落おちると何本なんぼんものつるを勢いきおいよく伸のばし、そのつるに、

ふるるん、ふるるん、ふるるん、

とたくさんの山やまぶどうの実みをつけました。よもつ醜女しこめは追おうのをやめて、餓鬼がきのようにぶどうに食くらいました。開あけた大おおきな口くちはまるで洞窟どうくつのようで、齒はがまったくありません。ぶどうはそのままるの丸呑みにされていきます。

そのすきにいざなぎは逃にげました。

よもつ醜女しこめはぶどうをあつという間まに食たべつくして、また追おつてきます。

こんどは右みぎの髪かみに差さしていた竹櫛たけぐしを投なげつけました。竹櫛たけぐしは地面じめんに落おちると、ころころと転ころがり、

ぼんつ、

と竹の子に変わりました。よもつ醜女が、むしろむしやがつがつと竹の子を食べている間にまたいざなぎは逃げます。

まったく頼りにならないよもつ醜女を見ていざなみは、八種の雷（いかづち）神と千五百の黄泉つ軍を新たに増やして追わせました。

軍勢は見る間に追いついていきます。

いざなぎは十拳劔を抜き、それを後ろ手に振りながら必死で逃げました。こうすれば相手にまじないがかかり、敵の氣力がなえるのです。そしてそのとおりに軍勢の追う勢いが衰え始めました。

いざなぎと軍勢の距離は少しづつ開いていきます。

そして、いざなぎはようやくあの世とこの世の境にある『黄泉つひら坂』にたどり着いたのでございます。

そこには一本の桃の木が生えており、まだしつこく追ってきてい

る軍勢に、その桃の実を三つ取って、ぽんぽんぽんと投げました。すると不思議なことに黄泉の軍勢たちは皆、桃を嫌ってザーツと逃げ帰りました。命びろいをしたいざなぎはその桃に向かつて、

「わたしを助けたように、この国で苦しい目にあつて悩んでいる者がいたら、これからも助けてあげなさい」

といい、この邪氣を払う桃の木に『おほかむづみの命』という名をさづけられたのでございます。このお話が、おとぎ話「桃太郎」の原型となりました。

さて、一人になつてもまだいざなぎは、髪を振り乱しながらものすごい形相で追つてきていました。そこでいざなぎは、千人がかりでないと動かせない『千引きの石』という大石を動かして『黄泉つひら坂』を塞いでしまわれました。

いざなぎといざなぎは、その大石を挟んで大声でののしりあいしました。

「いとしい夫であるいざなぎよ、こんなことをするのなら、あなたの国の人たちを毎日千人しめ殺してやる！」

「愛しい妻よ、おまえがそうするなら、わたしは毎日千五百人の子どもが産まれるように産屋を立てよう！」

そんなわけで、一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人生まれるようになったのでございます。

これが日本で初めての夫婦げんかでございます。やれやれ、困つたものでございます。

そんなこんなで、黄泉の国にとどまっていたいざなぎを黄泉津大神（よもつのおおかみ）もつとおおかみ）と呼び、ふさいだ大石を道返之大神（ちがえしのおおかみ）とおかみ）と呼ぶようになりました。

この黄泉つひら坂は、出雲の国の『いふや坂』だろうということでございます。

ところで一説によると、この喧嘩の最中に白山菊理姫（しらやま

くくりひめ）という女神めがみがどこから現あらわれて、二人ふたりの仲なかをとりもつために、いざなぎの側そばに寄り、耳元みみもとでなにかひそひそとささやきました。それを聞きいたいざなぎは「しか善よけむ（それは善よいことだ）」とうなづかれたとのことでございます。

しかし、白山菊理姫しらやまくくりひめが何なにをささやいたのかは今いまだに謎なぞのままとなっております。この言い伝つたえが石川県いしかわけんの白山比咩神社しらやまひめじんじやに語かたり伝つたえられております。

このあとのお話はなしはまたこの次つぎに。

意^オ富^オ加^カ年^シ豆^ズ美^ミ命^{コト}

わたしは桃^{モモ}の木^キです。『黄^ヨ泉^モつひら坂^{サカ}』

にはえています。

このあいだ、黄^ヨ泉^ミの雷^{カミ}勢^{セイ}に追^オいか
けられていたイザナギの神^{カミ}が
私の桃^{モモ}の实^ミを

ミツツ取って投げ

つけました。すると

軍勢カ

は、桃を嫌

って逃げ帰ってしま

イザナギの神は、私に

向かって『おおかむづみ』という名

前を

つけてくれました。大神の実という意味

です。大変気に入っています。



あき

第七話
だいななわ

両目と鼻から生まれた尊い神
りようめ はな とうと かみ



ふることに伝う。

黄泉の国からよみがえりたいざなぎは、
よみ くに

「わたしは何と汚い国に行っていたものか。この汚れを払うために
なん きたな くに けが はら

『みそぎ』をしなくては」

といい、身を清めるために、筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原に
い せいのりよう かわ みず たいかい おど あわぎがはら
行きました。そこは清涼な河の水が、大海へとそそぎこんでいる入
え
り江になっています。ここは汽水域といって真水と海水が、比重の
かんけい
関係で上下に分かれて混ざり合っている不思議な場所で、生命が
じようげ ふしぎ ぼしよ いのち

進化しんかするのにとっても重要じゆうようなところなのでございます。

そこで、いざなぎは身みにつけていたものを全部脱ぜんぶぎ捨すてられたのでございます。するとそれらの物ものから次々つぎつぎと神様かみさまが誕生たんじようしました。

まず、杖つえを投げ捨なてると、魔まをよける道みちしるべの神かみが、

帯おびを投げ捨なてると、長い道ながみちをふさぐ岩いわの神かみが、

袋ふくろを投げ捨なてると、ものを解放かいほうする神かみが、

衣ころもを投げ捨なてると、疫病神やくびようがみが、

はかまを投げ捨なてると、二又ふたまたに分わかれた道みちの神かみが、

かんむりを投げ捨なてると、餓鬼がきが、

左ひだりの腕飾うでかざりを投げ捨なてると、三柱みはしらのたたり神がみが、

右みぎの腕飾うでかざりを投げ捨なてると、三柱みはしらのけがれ神がみが現あらわれました。

こうして裸はだかになられたいざなぎは、今度こんどは水みずの中なかに入はいって体からだを洗あら

い清きよめようとされました。

「上流じようりゆうは流れが速はや過ぎる。下流かりゆうは遅おそい」

そう言^いつて、中流^{ちゅうりゅう}へと入^{はい}つていきました。

体^{からだ}を洗^{あら}つていきますと、黄泉^{よみ}の国^{くに}で付^ついた垢^{あか}から、二柱^{ふたはしら}の禍^{わざわい}（わ

ざわい）の神^{かみ}が生^うまれて流^{なが}れていきました。つづいて、禍^{わざわい}を直^{なお}す

三柱^{みはしら}の神^{かみ}（神直毘^{かむなおび}の神^{かみ}・大直毘^{おほなおび}の神^{かみ}・伊豆能売^{いずのめ}の神^{かみ}）が産^うまれ、禍^{わざわい}

の神^{かみ}を追^おいかけていきました。

いざなぎは、さらに深^{ふか}みへと入^{はい}り潜^{もぐ}つていきました。

海底^{かいてい}で体^{からだ}をぶるぶると震^{ふる}わせてすすぎますと、

底津綿津見^{そこつわたつみ}の神^{かみ}と底筒之男^{そこつつのお}の命^{みこと}が、

中^{なか}ほどこでぶるぶると震^{ふる}わせてすすぎますと、

中津綿津見^{なかつわたつみ}の神^{かみ}と中筒之男^{なかつつつのお}の命^{みこと}が、

水面^{すいめん}でぶるぶると震^{ふる}わせてすすぎますと、

上津綿津見^{うわつわたつみ}の神^{かみ}と上筒之男^{うわつつのお}の命^{みこと}がそれぞれ産^うまれたのでございま

す。

綿津見^{わたつみ}（わたつみ）の神^{かみ}は龍宮^{りゅうぐう}の守^{まも}り神^{がみ}で、筑紫^{つくし}（九州^{きゅうしゅう}）の海人族^{あまぞく}

の祖先^{そせん}になられた神様^{かみさま}です。筒之男^{つつのを}（つつのを）の命^{みこと}は航海^{こうかい}の神様^{かみさま}で、

なにわの墨の江に居られる住吉大社の三神でございます。

なお『つつ』とは潜水中に吐く息が泡つぷのようになって「つつ……」と昇っていくさまをいうのです。また、夜空にきらめく星も泡粒のように見えるので、古代は星のことも「つつ」といっておりました。筒之男の三神は、星をたよりの航海にはかかせない神でした。

このように、海や川の中に入り、水の靈力によって体に付いた汚れを払うという『みそぎ』の風習は、相撲の力士が土俵に塩をまいたり、葬儀の後の『清めの塩』として今も形を変えて伝わっているでございます。

いざなぎは、こんな風にして黄泉の国の汚れを払う『みそぎ』をされました、最後に顔を洗いました。

左の目を洗うと、太陽の神、天照大御神が、
右の目を洗うと、月の神、月読の命が、

鼻はなを洗あらうと、嵐あらしの神かみ、建速須佐之男たけはやすさのおの命みことが、お産うまれになりまし
た。

この三柱みはしらの神々かみがみは、いままでに産うんできたどんな神々かみがみよりも光ひかり
輝かがやき、生命力せいめいりきにあふれておりました。いざなぎは、

「わたしはたくさんかみがみの神々かみがみを産うみつつけてきたが、しめくくりに、
もつとも貴とうとい三柱みはしらの神々かみがみを得えた」

とたいそう喜よろこばれたのでございます。

ここまでで、いざなぎといざなみの産うんだ神様かみさまの合計ごうけいが八十一柱はちじゅういちはしら
(九く×九く)となり、国造くにづくりが完成かんせいしたのです。かけ算ざんも九九くく〓
八十一で完成かんせいします。この、神様かみさまと数の不思議ふしぎな関係かんけいは数霊かずたま(かず
たま)という学問がくもんにもなつて日本にほんに伝つたわつております。

そこで、八十一柱はちじゅういちはしらの子こどもを産うみ終おえたいざなぎは、高天原たかあまはらの神々かみがみ
から命めいじられていた国造くにづくりの役目やくめが済すみましたので、ご自分じぶんが身みに
つけていた、美しい玉たまの首飾くびかざりを取りとはずし、

「これからのことは頼みましたよ」

と天照大御神に譲りました。

それは、ゆらゆらと揺れては、いい音色を奏でるのでした。首飾りの名は『みくらたな之神』と申しまして、稲の霊が宿っております。

いざなぎは、光り輝く天照大御神に、

「あなたは、高天原を治めなさい」

もの静かな月読の命に、

「あなたは、夜の国を治めなさい」

すえつこの須佐之男の命には、

「あなたは、海原を治めなさい」

と命じられたのでございます。しかし、このいいつけに須佐之男

はふまん顔でした。さて、このお話はまたこの次に。

瀬織津比売

上流の澄んだ水の、岩だらけ
の、激しい流れの、そんな

処におりまして

あなたの罪穢

を祓います。

人形の撫子

につみかけれを移して
流して下さいな。



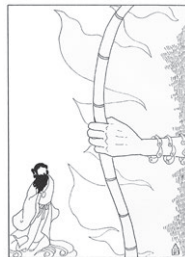
第八話 だいはちわ

暴れ者の須佐之男 あばものすさのお

ふることに伝う。 つた

天照大御神は、すべてのものに伸びる力と喜びの光りを平等にふりそそぎ、月読は、満ち欠けしながら静けさとやすらぎを与えておりました。こんな風にして、二人は、いざなぎから与えられた国をしっかりと治めていました。 あまてらすおみかみ

ところが須佐之男だけが不満なのか、ただ泣きわめいているばかりでございます。ひげが胸元に届くほどに年月が過ぎ去つても、まったく変わらない様子です。 すさのお



須佐之男は、豊かに満ちあふれていた、川、海、森の水分を自分の体に吸い上げて、涙として流し続けています。あまりに泣き続けるものですから、川、海、山は枯れてしまい、からからと荒れた国になってしまいました。

そのために『もののけ』が、蠅がむらがるように押し寄せ、不気味な音をたてて騒ぎはじめたのです。疫病がはやり、わざわざいも数知れず起こるようになってまいりました。

困ったいざなぎは、須佐之男のところにやって来ると、息子の顔をのぞきこみました。

「お前は どうして 国を治めずに、いつまでも泣きわめいているのか？」

すると須佐之男はよけい大声で泣き、ひっくり返って手足をばたばたさせて、

「俺はこんなところは いやなんだ！ 母の住んでいる根の国に行

きたいよー」

とますますだだをこねだしました。いざなぎは、こんな息子の様子を見てあきれてしまい、

「そんな弱虫はこの中つ国に住んではならない！　どこかへ行つてしまえ！」

と顔を真っ赤にして怒り、須佐之男を果ての果てまで追っぱらつてしまわれたのです。

我が子を追放したいざなぎは、たいへん氣落ちされ、しばらくののち、淡海の多賀に隠居されました。その場所は、近江の国（滋賀県）の多賀大社とも淡路島の多賀にある伊弉諾神宮ともいわれております。

さて、父にしかられて追放された須佐之男は、根の国に行く前に「姉の天照大御神にお別れのあいさつをしてこよう」とお考えになり、高天原へと昇っていきました。

その勢いきおいは大たい変へんなものでしたから、須す佐さ之の男おが高たか天あま原はらに近ちかづくにつれて、山やま、森もり、河かわはどよめき、大だい地ちはゆさゆさと激はげしく揺ゆれ動うごきました。

天照大御神あまてらすおみかみはこの大音響だいおんきやうに驚おどろき「須す佐さ之の男おがやつて来くるのはきつとわたしの国くにを奪うばおうとしているのだ」と思おもいました。それですぐに戦いくさの支度したくを始はじめられたのでございます。

まず長ながい髪かみを解とかれまして、男おとこがする角髪みずらに巻まき、その左さ右ゆうの角髪みずらにも、髪飾かみかざりにも、左さ右ゆうの手てにも、たくさんの美うつくしい勾玉まがたまがついたみすまるの珠たまを巻まいたのです。

背せ中なかには、千本せんぼんの矢やが入はいる筒つつを、わき腹ばらには五ご百本ひゃくぼんの矢やが入はいる筒つつをつつけられました。

さらに左手首ひだりてくびには、弓ゆみを射いると弦つるの反動はんどうを受けうけて、敵てきを威い圧あつするようたかな高おとい音おとの道具どうぐをつけました。

このように男おとこの戦いくさの格好かつこうをし、威風堂々いふうどうどうとして地面じめんを踏ふみ込こむと、土煙つちけむりが淡雪あわゆきのように舞まいあがりました。そして威勢いせいよく弓ゆみを

振り上げ、

「うおおー」

と男おとこのような雄叫おたけびをあげ、須佐之男すさのおの来くるのを待ち受まけたので
す。

そんなこととは知らしずに須佐之男すさのおは、のんきな顔かおで高天原たかあまはらにやつ
て来きたのでございませう。

天照大御神あまてらすおみかみは弟おとうとの姿すがたを見みつけるやいなや、

「どういふわけのぼで昇のぼって来こられたか！」

と大おお声こえを発はつしました。

さて、いったいどうなるのでしょうか。このお話はなしはまたこの次つぎに。

建速須佐之男神

ほくは伊耶那岐神の鼻から
産まれた須佐之男です、強いです。

大海原にたい居ます。

くしやみをすると
大岡で海がきいて

船がひっくり返たり
します。みんな困っている

ようですが、気にしません。

あと、ハ保大蛇と退治
したこともあります。

その時は、かだけではなく、ちよと
頭も傾いました。



第九話

天の安の河（天の川）でのうけひ



ふることに伝う。

「高天原を乗つ取るつもりか！」

ものすごい怒声に振り返った須佐之男は、弓矢をつがえた姉の姿を見つけて大変驚き、

「わたしは、高天原を奪いにきたものではありません。根の国に住む母のところへ行く前に、お姉さんにあいさつをしに来たのです」

「お前が嘘をついていないと証明できますか！」

須佐之男はすこし考えて、

「ひとつあります。互いに『うけひ』をして子どもを産み、神様に
どちらが正しいか判定してもらいましょう」

このように提案しました。

『うけひ』というのは、あらかじめある物事を神に約束しておいて、
その約束どおりの結果が現れるかどうかで、神意を占うことでござ
います。須佐之男は「それぞれ別々に子を産む」ということをして、
その結果で勝ちか負けかを判断しようとしたのです。

そこで二人は、美しい星々が集まっている『天の安の河（天の川）』
の兩岸に分かれて立ちました。

回りでは高天原の神々が、どうなることかと心配顔で見守ってい
ます。

まずさきに天照大御神が、須佐之男の剣をもらい受け、三つにへ
し折り『天の真名井』の聖なる水ですすぎました。そして、その剣
を歯でがりと噛み砕き、ぷーっと吐き出すと息吹が霧のように

広がり、その中から、三柱の海を守る姫神が産まれたのです。

長女は、たぎり姫（多紀理姫）。

次女は、いちきしま姫（市寸嶋姫）。

三女は、たぎつ姫（多岐津姫）。

この三姉妹は『宗像三女神』と呼ばれて、肥の国（福岡県）の宗像郡にある、沖の島・大島・宗像大社にそれぞれ祀られております。

とくに玄界灘に浮かぶ沖の島には古代の祭祀場である石座があり、たくさんの宝物が出土し、海の正倉院と呼ばれています。

この島は今でも、神々と神主以外は誰も足を踏み入れることができない禁足地なので、いまだに神々しいご神氣が島中に漂っております。

また、次女のいちきしま姫は『弁天さま』とも呼ばれて、宮島

(広島県)、江ノ島(神奈川県)、琵琶湖の竹生島、吉野の奥の天河などに祀られているのでございます。

さて、つぎに須佐之男が、天照大御神の身体につけていた五種類の珠飾りをもらい受け『天の真名井』ですすぎ、ばりばりと噛み砕き、ぷーっと霧のように吐き出しますと、五柱の男神が産まれました。

左の髪に巻いた珠飾りから産まれた長男は、
あめのおしほみみ(天の忍穂耳)と申します。

右の髪に巻いた珠飾りから産まれた次男は、

あめのほひ(天の穂日)。

額に巻いた珠飾りから産まれた三男は、

あまつひこね(天津日子根)。

左の腕に巻いた珠から産まれた四男は、

いくつひこね（活津日子根）。

右の腕に巻いた珠から産まれた五男は、

くまのくすび（熊野久須毘）。

ところで長男の正式な名前は、正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命と言つて「まさに勝った。私は勝った、素早く勝った」という意味なのです。

そこで、天照大御神は、自分が勝ったと確信して、

「五柱の男神は、わたしの珠から産まれたのでわたしの子です。

三柱の女神は、剣から産まれたからおまえの子です」

と言われたのです。ところが、須佐之男はその言葉を聞くなり、飛び上がって喜び、

「それならこの『うけひ』はわたしの勝ちだ。邪心がないから清らかで、か弱い女の子を得たのだ。これでわたしの潔白が証明された」

と自分勝手に解釈して、

「勝った！ 勝った！」

とはしやぎまわったのです。

よくよく考えてみれば、お二人は『うけひ』をする前に男を産んだ方が勝ちだとか、女を産んだ方が勝ちだという取り決めをされてはいなかったのです。

早がてんした須佐之男の喜びようは尋常ではありません。田畑を壊し、溝を埋め、あげくの果てには、神々の台所にまで大便をまき散らしふざけ回りました。

けれども天照大御神はとがめないで、やさしく、

「糞のようなのは、酒に酔って吐きちらしたゲロでしょう。田のあぜを壊して溝を埋めたのは、耕す土地を増やそうとしたのでしよう」

と他の神々から弟をかばわれました。

そんな姉の心を知らず、調子にのった須佐之男の乱暴は、ますます

すひどくなるばかりです。

まだら模様もようの馬うまの皮かわを生いきたまま逆さかはぎにして、天照大御神あまてらすおおみかみがお仕事しごとをされている機織はたおり小屋こやの上うえに登のぼり「えいつ！」とばかりに天井てんじやうから投げなこんだのです。

部屋へやにいた機織はたおり女めはたいそう驚おどろき、氣絶きぜつしてその場ばに倒たおれ込んでしまいました。その拍子ひょうしに手てに持もっていた梭ひ（両端りやうたんの鋭すどく尖とがった横糸よこいとを通とおす木の道具どうぐ）を取り落おととしてしまい、それが運悪うんわるくほと（女陰じょいん）にぐさりと突き刺ささり死しんでしまいました。天照大御神あまてらすおおみかみはそのありさまをすぐ近ちかくで見ておりました。

そもそも機織はたおり小屋こやは神様かみさまの衣ころもを織おるための神聖しんせいな場所ばしよです。そこを血ちで穢けがしたうえに死人しにんまでだしたのです。天照大御神あまてらすおおみかみは、このとんでもないことをしてかした須佐之男すさのおこなの行おこないに、激怒げきどし、嘆なげかれました。しかし、悲しかなみのあまり怒おこる氣力きりよくも失うせたように、ただ黙だまったまま外そとに出でられると、そのまま『天の岩戸あまのいわと』にお隠かくれになら

れてしまいました。

するとどうでしょう。高^{たか}天^{あま}原^{はら}は夜^{よる}のように真^まつ暗^{くら}になってしまっ

たのでございます。

さあ大^{たい}変^{へん}なことになってしまいました。このお話^{はなし}はまたこの次^{つぎ}に。

市寸嶋比売命

あまてらす大御神が
すさのおの剣を

三つにへし折りました

それを天の真名井の水で

すすぎました。

口にはうりひんで

かりがりがみくだきま

した。雨霧のようにふり、

と吹き出しました。

たぎり帷がふきました。

ゆたしがふきました。

たぎり帷がふきました。

わたしたちは、海を守る女神です。



第十話 だいじゅうわ

天の岩戸開き あま いわとひら



ふることに伝う。 つた

高天原にある天の岩戸に天照大御神がお隠れになつてしまわれたために、高天原と中つ国から太陽の輝きが消え失せ、すっかり暗闇に覆われてしまいました。そのため神々の不満や怨差の声が聞こえ初め、たくさんの方々が起り出しました。

「どうすれば天照大御神を岩戸からつれ出すことができるだろう
か」

非常召集令によって天の安の河原に八百万の神々があつまり、
解決策をねるために、高天原会議を開くことになったのでござい
ます。その席で『造化三神』の一人『たかみむすひ』の神の子で、
高天原一の知恵者、思金（おもひかね）の神が名案を出しました。
八百万の神々も満場一致でその意見に賛成し、さっそく準備が始め
りました。

まず、太陽の使いの長鳴鳥を集めて、いつせいに「アサー」と鳴
かし、

また、高天原の堅い石を取り、くろがねを造り、ひとつ目の
鍛冶職人あまつまら（天津麻羅）に鉄を打たせ、

また、鏡造り職人いしこりどめ（伊斯許理度売）に命じて大きな
『八尺鏡』を作らせ、

また、玉造職人たまおや（玉祖）に命じて『八尺の勾玉のみすま
るの珠飾り』を作り、

また、あめのこやね（天児屋）、ふとだま（布刀玉）に命じて天の

香久山かぐやまのははかの木き（朱桜かにわさくらの木き）を燃もやして鹿しかの肩骨かたほねを焼やいて占うらないをし、

また、天あめの香久山かぐやまのさか木きを根ねこそぎ掘ほり取とつて、その上うえの枝えだに『勾玉まがたまのみすまるの珠飾たまかざり』を取りつとけ、中なかの枝えだに『八尺鏡やまたかがみ』をかけ、下したの枝えだに『白しろと青あおの幣ぬさ』を垂たらして、ふとだまが持もち、

また、あめのこやねが天照大御神あまてらすおみ出現ゆつげん祈願きがんの祝詞のりとを唱となえ、

また、あめの手力男たちからおが岩戸いわとのわきに隠かくれ、

天照大御神あまてらすおみを誘さそい出だす大宴会だいえんかいの準備じゆんびは大わらわです。

こうして、岩戸いわとの前まえには八百万やおよろずの神々かみがみが、わいわいがやがやと勢せいぞろいされました。

そこへ登場とつじようしてきたのが神々かみがみの人氣者にんきもの、あめのうずめ（天宇受売あめのうずめ）でございました。天あめの香久山かぐやまのひかげのかづらをたすきにかけ、まさきのかづらを髪飾かみかざりにし、魔まよけの笹ささの葉はを手てに持もつています。

そして、ステージがわりの大おおきなおけを伏ふせてその上うえに乗り、と

んとりズムをとりながら面白おかしく踊り始めました。おけは打楽器のように大きな音を鳴り響かせています。調子に乗ったあめのうずめは、しだいしだいに神がかり状態になり、踊り狂い出したのでございます。

乳は左へ右へ、上へ下へと揺れ動き、裾はめくれて女陰はあらわに見え隠れました。

日本初のストリップでございます。そのようすがとてもおかしく、神々はお腹をかかえてどっと笑ったのです。『咲ひ』と踊りは、邪氣を払う呪術のひとつでもあるのです。そのどよめきは高音響となり高天原中に響きわたりました。

そればかりか、あめのうずめにつられて八百万の神々も立ち上がり、思い思い体をゆすって踊り出し、岩戸の前のにぎやかさは今やたけなわです。

「世の中は暗く嘆いているはずなのに、どうして外はにぎやかに笑い踊っているのだろうか？」

岩戸いわとの中の天照大御神あまてらすおおみかみは不思議ふしぎに思いおも、そつと戸とを細ほそめに開あけました。

それを見みたあめのうずめは、すかさず、

「あなたさまよりも尊とうとい神かみがおられるので、うれしくなつて皆みなでえらぎあそんで（歡喜咲楽えらぎあそぶ）いるのですよ」

とくるくる舞まい踊おどりながら答こたえました。そこへさつと、ふとだま
とあめのこやねの二人ふたりが、いしこりどめの作つくつた大きな鏡かがみを差さし出だ
し、天照大御神あまてらすおおみかみの姿すがたを映うつしました。天照大御神あまてらすおおみかみは、鏡かがみに映うつつたのが
自分じぶんだとは知しらずに、もつとよく見みようと少しすこずつ岩戸いわとから体からだをの
り出だされたのです。

余談よだんですが、伊勢神宮いせじんぐうでは今いまもこの天あまの岩戸いわと開ひらきのご神事しんじを再さい現げん
し、二十年にじゅうねんに一度いちどの式年遷宮しきねんせんぐうの時とき、暗くらやみの中で神官しんかんがご正殿しょうでんの前まえ
に正座せいざし「カケコー！ カケコー！ カケコー！」と三度さんど、天あめの
長鳴ながなき鳥どりの鳴なきマネをしてからおもむろに御扉みとびらを開ひらき、ご神体しんたいの鏡かがみ

を取り出して、いるということでございます。

それから祝詞を奏上した「あめのこやねの命」ですが、枚岡神社（大阪府）・春日大社（奈良県）にお祀りされています。枚岡神社では、毎年新しい七五三縄の下で大笑いするという岩戸開きのご神事が齋行されています。

また、現在では伊勢の天照大御神への一番大切なお供え物はあわびとされており、古代はあわびの中に偶然の産物として育まれた天然の真珠を不老不死の秘薬として大変珍重していたのです。そこで、神代にはあわび玉（真珠）のついたあわびをお供えし、天照大御神の力が二度と衰えることのないようにとの願いを込めてお祀りしたのでございます。

さて、余談が長くなりましたが、「岩戸開き」のものがたりは、このあとといったいどうなっていくのでしょうか？

このお話はまたこの次に。

アマテラス
天照大御神

すんでゐる処は

高天原です。

すべての物に

生命の

エネルギー

をソソ

ぎす。

それから、私はイザナギの

左目から生まれました。



第十一話
じゅういちわ

尻に大豆、ほと（女陰）に麦
しり だいず ほと（ほと）むぎ



ふることに伝う。
つた

外にもう一人のたいそうりっぱな神様が
そと ひとり かみさま
いることを不思議に思わ
れた天照大御神は、岩戸からほんの少し
あまてらすおおみかみ いわと すこ からだ
体を乗り出しました。その
瞬間、隠れていた手力男が天照大御神の手をつかみ、怪力
しゆんかん かく たちからお あまてらすおおみかみ て かいりき
でぐいと
外に引っ張り出したのです。そして、すぐに太玉命が岩戸に、宇宙
そと ひ ふとたまのみこと いわと うちゆう
創生の神である造化三神、別天つ神五柱、神世七代の宿っている『し
め縄（七五三縄）』を張り、
めなわ（しめなわ）をは

「これで二度とお隠れになることはできません」
にど かく

と岩戸の前に立ちふさがりました。

このとき、怪力の手力男が力まかせに岩戸を開けたので、その勢いで戸がはずれて下界に落ちてしまいました。はずれた戸の落ちたところが信州の戸隠山だといわれております。

高天原一の知恵者、思金（おもひかね）の神のはかりごとは、こんな風につつがなくともうまく運びました。このようなわけで高天原と中つ国に光がふりそそぎ、ふたたび明るくなったのでございます。神々は、太陽の神、天照大御神のすばらしさを前にも増してほめたたえました。

昔から、暗いときには楽しく笑い遊ぶことが最良の方法（笑う門には福きたる）だったのでございます。

お手柄のあめのうずめは、このとき以来、芸能の神、お神楽の元祖となりました。

また、しめ縄（七五三縄）には「もう二度と太陽が隠れませんよ

うに」という願いが封じ込められているのです。新しい年の初めに太陽の復活を祝ってしめ飾りをする習慣は、こうして神代からずっと続き「今年も太陽の恵みをいっぱいただけますように」という思いを込めて初日の出を拝むようになりました。

この、天照大御神は伊勢神宮（内宮）のご祭神としてお鎮まりになつておられます。また、一説によると、天照大御神がこめられた岩戸は、宮崎県の高千穂にある天の岩戸神社に、いまでも残っているというところでございます。

さて、このような騒動になったのは、もとはといえば須佐之男が原因です。神々は須佐之男の処分をどうするか相談いたしました。そして、二つの刑を決められたのです。

ひとつは山のようにたくさんのお品物を差し出すこと、ひとつは須佐之男の髭と手足の爪を切り、けがれを払うというものでした。

神々は、それらをとどこおりなく済ますと須佐之男を放しまし

た。

大騒おおさわぎも静しずまりようやくひと息いきついた神々かみがみは、空腹くうふくを覚おぼえたので食たべ物の神かみおおけつ姫ひめ（大宣都比売おおのけつひめ）に、おいしい料理りようりを作つくつてくれるように頼たのみました。

おおけつ姫ひめは、はな、くち、大きなお尻しりから食たべ物ものを取り出としてごちそうを作つくる不思議ふしぎな女神めがみです。そこで、さつそくはりきつて料理りようりに取りかかりました。

まず、おしりから、五色ごしきのお米こめをとり出だしてご飯はんを炊たきました。また、おしりから山やまいもを取り出だして口くちに放ほうり込こみ、ぐちやぐちやとよく噛かんで、それをよだれのように垂たれ流ながし、おいしそうなとろろ汁じるを作つくりました。鼻はなからは、あずきや栗くりをまるで鼻はなくそのようにほじくり出だして、ぐつぐつと煮に込んでいます。

ほんとうに楽たのしそうに歌うたを口くちずさみながら、美味おいしいものをつくらうと一生懸命いっしょうけんめいです。

偶然ぐうぜん通りかかつて、その光景こうけいをのぞき見ていた須佐之男すさのおは、

「おえつ。」

なんと汚きたないことをするやつだ。あれを食たべろというのか！」

と言いうなり駆かけ寄より、大おおきなお尻しりのおおけつ姫ひめを剣つるぎで斬きり殺ころしてしまつたのでございます。

殺ころされてもさすがに食物しょくもつの神様かみさまです。死体したいからは食たべ物ものがどんど

ん出でてきます。

頭あたまから蚕かいこが、

目めからは稲いねが、

耳みみからは粟あわが、

鼻はなに小豆あずき、

ほと（女陰じょいん）に麦むぎ、

尻しりに大豆だいずが生しょうじました。

死体したいに成なつたこれらを、宇宙うちゆうを創造そうぞうされた造化三神ぞうかさんじんの一人ひとり、かむ

みむすひの神かみが採とつて、種たねとされました。それがいまわたしたちの

食たべている五穀ごこくと養蚕ようさんの起源きげんということでございます。

このおおけつ姫さまは、阿波の国（徳島県）の神山町にある、

上一宮大栗神社の御祭神としてお祀りされています。

さて、堪忍袋の緒が切れた神々は、またもや乱暴を働いた須佐之男

を、ついに高天原から下界（中つ国）へと追放しました。

というわけで須佐之男は、出雲の肥の河の上流、鳥髪というところに降りたちました。そこには大きな川が流れております。

須佐之男はその川に箸が流れてくるのを見つけ「川上に人が住んでいるに違いない」と思い、上流へと上つていきました。

箸を使って食事をするという風習は、神代からすでに日本人々の生活習慣として根づいていたのでございます。

しばらく歩いていくと、老夫婦が麗しい乙女を真ん中にして、しくしくと泣いているのに出会いました。

いったいどうしたというのでしょうか。このお話はまたこの次に。

大氣都比売神

おいしい食べ物を作る神々まで

お尻から魚を出しました。

口からごはんを吐き出しました。

鼻から獣を出しました。

焼いたり煮込んだりして

大きなお皿に盛りつけました。

須佐之男神は

「食べ物を食べさせる方法」と思て

食べ物の神々を殺しました。

その死体から、稲、小豆、麦、粟、大豆

の五穀が生まれました。



だいじゅうにわ
第十二話

やまた おろち
八俣の大蛇（おろち）
たいじ
退治



ふることに^{つた}伝う。

かわ じようりゆう
川の上流で泣いている老夫婦とおとめ
ふ しぎ おも
不思議に思いたずねました。

まえ
「お前たちは何者だ？」

くにかみ
「わたしは国つ神『おおやまつみの子』で名前はあしなづち
あしなづち つま
（足名椎）、妻はてなづち（手名椎）。娘はくしなだ姫（櫛名田姫）
むすめ
と申します」

な
「なぜ泣いているのか？」

「わたしたち夫婦にはもともと娘が八人おりました。しかし毎年高志の国（北陸地方）から八俣のおろちがやって来て、一人ずつ娘を喰らうていくのです。もうこの娘ひとりしか残っておりません。そのおろちが、もうすぐやって来るのです。最後に残った、たった一人のこの娘ともお別れかと思うと悲しくてなりません」

「おろちとはどんな形をしているのか？」

「目はほおづきのように赤く、胴体はひとつで、八つの頭、八つの尾があります。からだには苔や檜、杉が生え、その大きさは八つの谷と峰をまたぐほど。腹はいつも血でにじみただれております」

「よし、わたしがその八俣のおろちを退治しよう。ところで娘をわたしの妻に出来ないか」

「えっ？ あなた様は、どなた様でしょう？」

「わたしは、天照大御神の弟だ。いま高天原から降りてきたところだ」

「それは恐れおおいこと、そのような方なら喜んで娘を差し上げま

しよう」

須佐之男はそれを聞くと、娘をばつと櫛に変え、髪の毛に差してしまわれました。そして老夫婦に、

「八塩折りの酒（とても濃い酒）を造り、垣根を張りめぐらせて八つの門を作れ。それぞれの門に台を作り、上になみなみと酒を注いだ酒樽を置くように！」

と指示されたのです。

やがて準備も整い、須佐之男が隠れて待つておりますと、あたりのようすが一変し、空には不気味な黒雲がたれこめ、稲妻が光り、雷鳴が響きました。地鳴りがし、木の裂ける大きな音が聞こえたかと思うと、四方の山が突然崩れ落ち、周囲から八つの鎌首をもたげた、すさまじい形相の八俣のおろちが現れたのです。おろちがひとたび息を吐けば、それは嵐となり、大岩が飛んでいきます。

須佐之男はその様子を息を殺してごらんになっておりました。

おろちの八つの頭は、地を這い空をうかがい、なにやら捜している風でした。そして、あたりに漂う、うまそうな酒の匂いにつられて、八つの頭を八つの酒樽につき入れ、飲み始めました。

おろちは赤い目をさらに赤く充血させ、ぺちやぺちやがぶがぶとのを波打たせながら飲みほしてしまいました。そうしてしたたかに酔い、大いびきをかいて寝てしまったのです。

そのときを待っていた須佐之男は、用心しながらそつと、おろちに近づき、十拳劔を抜いて、

ひ・ふ・み・よ・い・む・な・や、

とおろちの八つの頭をばらばらに斬り落としてしまわれました。胴体からは血がどうどうと噴き出しています。血の海の中におろちの首がごろんごろんと転がっております。

流れ出た大量の血は川に流れ込み、真つ赤に染まってしまいました。このおろちの血で緋色に染まった川を『肥の河』と人は呼びま

した。

つぎに、須佐之男はとどめをさそうと思い、八つの尾を順番に斬り落としはじめました。そして、真ん中の尾を斬り落とそうとしたときに「カキツ」という音がして、剣の刃がかけてしまいました。

どんなものでも斬ることのできる、この十拳剣の刃がこぼれるはずはありません。不思議に思っ蛇の尾を裂いてみますと、そこにはひとつの大刀が、らんと輝いて収まっているのです。

さてこれは一体なんでしょう？ このお話はまたこの次に。

櫛名田比売

わたしは稲田を

守っている巫女

です。大蛇に

食べられてしまっ

と思っただら

スサノオの命に

助けられました♡



第十三話
だいじゅうさんわ

八雲立つ出雲
やくもた いずも



ふることに伝う。
つた

八俣のおろちをみごとに退治した須佐之男は、まん中の尾から、
美しく光る大刀を手に入れました。渦の模様がついており、みるか
らに特異なもののように見えます。須佐之男は、高天原でさんざん
迷惑をかけたおわびに、天照大御神にこの大刀を献上することにい
たしました。

これが、のちに大和朝廷に伝わって三種の神器のひとつとなった
『草なぎの剣』なのでございます。この剣は、尾張の国（愛知県）

の熱田神宮あつたじんぐうにご神体しんたいとしてお祀りまつされております。

さて、高天原たかあまはらでは乱暴らんぼうばかり働はたらいていた須佐之男すさのおですが、ここでは英雄えいゆうです。それに、くしなだ姫ひめという美しい妻つまも得えて、とても幸せしあわせそうなごようでした。

ある日ひ、お二人ふたりが出雲いずもを歩き回り、新居しんきよをさがし求めていたとき、見晴みはらしの良い土地よとちに出でくわしました。そこは大地だいちから目めに見えないうエネルギーが吹き出だしている神聖しんせいな所ところでした。

「おおつ。ここはなんとすがすがしいところだろうか」

と須佐之男すさのおはそう言いって、その地ちを須賀すがと名なづけ、そこに立派りっぱな宮殿きゆうでんをお建たてになられたのでございます。

自然しぜんと共に暮くらしていた古代こだいの人々ひとびとは、このような場所ばしょを直感ちよくかんで感じるかんことができ、そこを聖地せいちとして代々だいたい大切に守まもってきたのです。その場所ばしょが神社じんじやや鎮守ちんしゆの杜もりとなつて日本の各地にほんかくちにたくさん残のこつているのでございます。

やがて宮殿が完成したとき、お二人のご結婚を祝福するかのよう
な雲が、幾筋もむくむくと立ち昇りました。その情景を、須佐之男
は歌に詠まれました。

やくもた　　いずもやえがき
八雲立つ　　出雲八重垣
つまご　　やえがきつく
妻籠みに　　八重垣作る
その八重垣を

この三十一文字から和歌がはじまり、万葉集、古今和歌集などへ
と受け継がれていきました。そして、ごく自然に人々の間に歌を詠
むことが流行りだし文化として定着し、中つ国（日本）は歌詠みの
国とまでいわれるようになったのでございます。

須佐之男は、くしなだ姫の父親、あしなづちを須賀のこの宮殿の
長老に任命し、稲田の宮主、須賀之八耳の神と名づけました。

やがて、須佐之男とくしなだ姫との間に子どもも生まれ、名を

『やしまじぬみ』とつけられて、出雲の土地神となりました。子孫も繁栄し、末永く幸せに暮らしました。

また、須佐之男は他に、おおよまつみの娘「神大市姫」とも結婚されて『大年の神』『宇迦の御魂の神』を産んでおられます。

『神大市姫』は市場の神様。

『大年の神』は一年間の稲の豊作と恵みをもたらして下さる年神様。

『うかのみたまの神』は稲の守り神で、お稲荷さん（稲成り）の本来の姿なのです。だからお稲荷さんに商売繁盛や現世利益をお願いするのは、ちよつと見当違いなのでございます。

さて、ここから少しややこしくなってきましたので、よく聞いてくださいね。阿礼も何とかわかりやすくお話するように頑張りますから。いいですか。

須佐之男すさのおとくしなだ姫ひめの子ども、

『やしまじぬみの神かみ』は、おおやまつみの娘むすめ「このはなちる姫ひめ」を妻つまにして『ふはのもぢくぬすぬの神かみ』を産うみ。

『ふはのもぢくぬすぬの神かみ』が、おかみの神の娘むすめ「ひかは姫ひめ」を妻つまにして『ふかふちのみづやれはなの神かみ』を産うみ。

『ふかふちのみづやれはなの神かみ』が「あめのつどへちねの神かみ」を妻つまにして『おみづぬの神かみ』を産うみ。

『おみづぬの神かみ』が、ふのづのの神の娘むすめ「ふてみみの神かみ」を妻つまにして『あめのふゆきぬの神かみ』を産うみ。

『あめのふゆきぬの神かみ』がさしくにおほの神の娘むすめ「さしくにわか姫ひめ」を妻つまにして『大國主の命みこと』を産うみ。

はい、お疲れつかれさまでした。ようやくこれからのお話はなしの主人公、須佐之男すさのおから数かずえて六代目ろくだいめ『大國主の命みこと』がお産うまれになりました。

ひとりでも知^しっている神^{かみ}さまがおられたでしょうか？

これから、大^お国^{くに}主^{ぬし}が、広^{こう}大^{だい}な領^{りやう}土^どを^て手^てに^い入^いれる^ままでの^だ大^{だい}冒^{ぼう}険^{けん}が^は始^じまり^はす。高^{たか}天^{あま}原^{はら}の暴^{あば}れ^ん坊^{ぼう}、須^す佐^さ之^の男^おに^はし^ばら^くの^{あい}間^だお^{やす}休^{やす}み^ね願^{ねが}い^まし^{よう}。

あ、そう^そう^う。須^す佐^さ之^の男^おと^くし^なだ^ひ姫^めは^い出^い雲^{ずも}の^さ佐^さ草^{くさ}に^ある^や八^や重^え垣^き神^{じん}社^{じゃ}や^{さい}埼^{いた}玉^{まけ}県^{けん}の^ひ氷^{かわ}川^{わじん}神^{じん}社^{じゃ}に^ふ二^{たり}人^りそ^ろろ^つて^お祀^{まつ}り^され^てお^られ^ます。また^す須^す佐^さ之^の男^おは、^{あい}愛^い知^ち県^{けん}の^つ津^し島^{まじん}神^{じん}社^{じゃ}や^い出^い雲^{ずも}の^く熊^ま野^の大^{たい}社^{しゃ}、^そし^て祇^ぎ園^{おん}祭^{まつり}で^{ゆう}有^い名^{めい}な^き京^{きやう}都^との^や八^や坂^{さか}神^{じん}社^{じゃ}に^まも^お祀^{まつ}り^され^て、^に日^に本^{ほん}中^{じゆう}に^え疫^{えき}病^{びやう}が^{まん}蔓^{えん}延^{えん}し^ない^{よう}に^わ私^{わたし}たち^を守^{まも}つ^てお^られ^ます。

この^{あと}後^{はな}のお^{はな}話^{なし}は^{つぎ}また^にこの^{つぎ}次^に。

草那藝之大刀

ぼくは大蛇のしほ
からでてきたよ。

都牟羽の大刀

とかアマノムラウモツルギ
天叢雲劍

とがよばれてるぞ!!



だいじゅうよんわ
第十四話

いなばの白兎
しろうさぎ

ふることに伝う。
つた

大國主は、ほかに、
おおくにぬし

・おおあなむち（大穴牟遲）
おおあなむち

・あしはらのしこを（葦原色許男）
あしはらのしこを

・やちほこ（八千矛）
やちほこ

・うつしくにたま（宇都志国玉）
うつしくにたま

という五つの名前で呼ばれておりました。試練をへるごとに、よ
び名を変えて登場してこられますから覚えていてください。



さて、大國主には、八十人もの兄がいました。兄たちはそれぞれ広い領地を持っていましたが、そのすべての國土を弟の大國主に譲ることにしました。それにはつぎのようなわけがあつたのです。

稲葉に八上姫という美しいお姫様がおりました。姫をお嫁さんにしたいと思つた兄たちは、結婚を申し込むためにそろつて稲葉へと旅立ちました。

おおあなむち（大きな穴の中の偉大な人）は、兄たちの荷物を大きな袋に入れて担がされています。そして列の一番うしろを従者のような姿で歩いていました。これがあの有名な、大きな袋を担いだ大國（大黒）さんのお姿なのでございます。

ある日、氣多という海岸を一行がワイワイガヤガヤと通りかかりますと、皮をはがれた赤裸の兎が、

「いたいよ。いたいよ」

と泣いているのに出会いました。兄たちは兎に、

「海水^{かいすい}につかり、山^{やま}の上^{うへ}で風^{かぜ}に吹^ふかれておればすぐに良^よくなる」

そう言^いって、またガヤガヤと立^たち去^さりました。

これでこの痛^{いた}みから解放^{かいほう}されると思^{おも}った兎^{うさぎ}は、さつそく言^いわれたとおりにしました。ところが海水^{かいすい}の塩^{しお}が乾^{かわ}くにつれて皮膚^{ひふ}がひび割^われ、前^{まえ}よりももっとひどく痛^{いた}み出^だしたのでございます。

エーン。エーン。エーン。

そこに、遅^{おく}れてやつて来^きたおおあなむぢが通^{とお}りかかり、痛^{いた}々々しい兎^{うさぎ}を見^みつけて、

「うさぎさん。これはいったいどうしたのだ？」

と声^{こえ}をかけられました。

兎^{うさぎ}は、今^{いま}までの自^じ分^{ぶん}の身^みに起^{おこ}ったことを、のこらず話^{はな}し始^{はじ}めました。

「わたしは隠岐島^{おきのしま}に住^すんでいましたが、この地^ちに渡^{わた}ろうと思^{おも}っても渡^{わた}ることができません。そこで、わに鮫^{ざめ}をだまして、こんなふうに言^いったのです。

『お前たちと、ぼくたちとどっちの数が多いかくらべっこしよう
 じゃないか。だからおまえは仲間を全部集めてここから氣多の岬ま
 で順序よく並ぶんだ。わたしはその上を、数をかぞえながら走って
 渡ろう。そうすれば、どちらが多いかすぐにわかる』
 それでピョンピョン渡り始めたのですが、もう一歩で岸に着くと
 いうところで、わたしは、

『うそだよー。とんまの鯨やあーい。ぼくはこっちに渡りたかった
 だけだ！』

と言ってしまったのです。それで怒った最後の一匹に捕まって、
 皮をはがれて赤むけにされてしまいました。あまりに痛くて泣いて
 いたら、先程通りかかった八十人の神々が、

『海水を浴びて風に吹かれていろ』

と言うのでその通りにしたら、前よりもひどくなったのです。エー
 ン、エーン」

この兎いったいどうなるのでしょうか。このお話はまたこの次に。

イナバシロウサギ
稲羽素サ免

鮫^{サメ}に皮^{かわ}をはがれて

キズだらけになっ
ただけど大^ま国^{くに}主^{しゅ}

の言うとおりにガマ
の穂^ほ綿^{わた}にくるまったら
治^{なお}ったよ。



だいじゅうごわ
第十五話

あかいのしし
赤い猪

ふることに伝^{つた}う。

兎^{うさぎ}は、わに鮫^{ざめ}をだましたために皮^{かわ}をはがれたこと、兄^{あに}たちの教^{おし}え
た治療^{ちりよう}によって、傷^{きず}がよけいにひどくなつたことを話^{はな}し終^おえました。
それ^きを聞^きいたおおあなむちは、

「すぐ^{みなと}に水門^{みずかど}(河^か口^{こう}・汽^き水^{すい}域^{いき})に行^いき、その水^{みず}で体^{からだ}を洗^{あら}いなさい。
それ^がから蒲^{がま}の穂^ほ綿^{わた}(穂^ほ黄^{おう})を取^とり、敷^しき散^ちらしてその上^{うへ}に転^{ころ}がりな
さい。そうすればきつと傷^{きず}も癒^いえるだらう」

と教^{おし}えられました。



兎うさぎは、すぐにその通りとおにしました。すると本ほん当とうにきれいに傷きずが治なおってしまったのです。この治療法ちりょうほうは、日本古来にほんこらいの藥草療法やくそうりょうほう（和法わほう）として今いまも人々ひとびとに伝えられていたのでございます。

これがあの有名ゆうめいな『いなばの白兎しろうさぎ』のお話はなしです。

じつはこの『いなばの白兎しろうさぎ』、兄あにたちが求婚きゆうこんしに行った八上姫やかみひめの使つかいの兎神うさぎがみだったのです。それでこんな予言よげんをおおあなむぢに言いいました。

「八十神やそがみたちは八上姫やかみひめを妻つまにはできないでしょう。袋ふくろを背負せわされ従者じゆうしやのようですが、あなたが姫ひめを獲得かくとくなさるでしょう」

さて、先さきに稲葉いなばに着ついた兄あにたちは、八上姫やかみひめに求婚きゆうこんしましたが、

「わたしは、あなたがたの誰だれとも結婚けつこんするつもりはありません。わたしは、おおあなむぢに嫁とつぎます」

と冷つめたく追おい返かえしました。兎うさぎの予言よげんどおり八十人全員はちじゅうにんぜんいんみごとにふ

られてしまったのです。

兄^{あに}たちは、八上^{やかみひめ}姫^めが「わたしは、おおあなむぢに嫁^{よめ}ぎます」と言^いった言^{こと}葉^はを聞^きいて「なんであんなやつが!」とかつとなつていました。それで、おおあなむぢを逆^{さか}恨^{かう}みして、「あいつさえいなければ八上^{やかみひめ}姫^めと結^け婚^{こん}できるのだ。途^{とち}中^{ゆう}で捕^{つか}まえて殺^{ころ}してしまおう」という相^{そう}談^{だん}をしました。

一^い方^{っぽう}、おおあなむぢは、大^{おお}きな袋^{ふくろ}を背^せ負^おつてゐるために、ずいぶん遅^{おく}れて山^{やま}の麓^{ふもと}をふうふういいながら歩^{ある}いていました。兄^{あに}たちは、そこへやつて来^きて、

「おおあなむぢよ。この山^{やま}の上^{うへ}に赤^{あか}い猪^{いのしし}がゐる。俺^{おれ}たちがそれを追^おい下^{くだ}すから、おまえは下^{した}で待^{まち}ち構^{かま}えて捕^{つか}まえろ。もし捕^{つか}まえそこなつたらお前^{まえ}を殺^{ころ}すぞ」

と命^{めい}じました。素^す直^{なお}なおおあなむぢは、言^いわれるままにイノシシが追^おわれてくるのを山^{やま}のふもとで待^{まち}つておりました。

そこで、兄たちは猪の形にそっくりの大岩を真つ赤に焼き、

「えいつ」

と力いっぱい山の上から転がり落としたのです。

そんなこととは知らないおおあなむぢは、勢いよく転がってきた焼石をイノシシだと思つて全身で受け止めました。

山の中に悲痛な叫び声が響きわたりました。

見るも無残、おおあなむぢは、全身に大やけどを負つて死んでしまったのでございます。すぐ側には焼け石が転がっており、まだくすぶつた煙が立ち昇っております。

兄たちは全員、山の上で躍り上がつて喜んでいます。

そのことを知つたおおあなむぢの母の『さしくにわか姫』が、髪をふり乱して高天原に駆け昇り『造化三神』の一人、かむみむすひの神の袖に取りすがつて息子の命乞いをされました。

母の必死の願いに心を動かされたかむみむすひの神は、

赤貝あかがいの女神めがみ『きさがい姫ひめ』と

蛤はまぐりの女神めがみ『うむがい姫ひめ』

を下界げかいに遣つかわされ、治療ちりようにあたらせました。

きさがい姫ひめは貝かいの粉こなをこそいで集あつめ、うむがい姫ひめはその粉こなを貝汁かいじるで溶といて母乳ぼにゆうのようにして火傷やけどに塗ぬりました。

すると……、不思議ふしぎ、不思議ふしぎ、おおあなむちはすぐに息いきを吹き返かえし、元氣げんきに歩き回まわれるようになったのでございます。

やけどの治療ちりようには貝汁かいじるが、とてもよく効きくということでございます。

そうそう言いい忘わすれておりましたが、いなばの白兔しろうさぎは、鳥取県とっとりけんの白兔海岸はくとかいがんにある白兔神社はくとじんじやのご祭神さいじんとしてお祀まつりされています。今いまも海岸かいがんを歩あるくと、どこからか白うさが現あらわれてくるかもわかりませんね。

さて、おおあなむちが生いき返かえったことを知しった兄あにたちは、またも

やよからぬ相談事そうだんごとをしています。

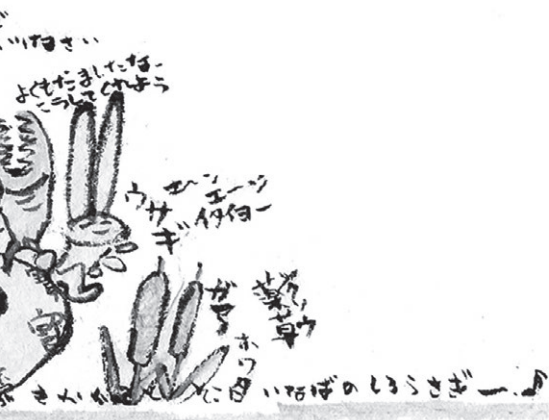
「あいつをもう一度殺いちどころしてしまおう」

という計画けいかくを立てていたのです。

恋こいのうらみというのは本ほん当とうに怖こわいものですね。

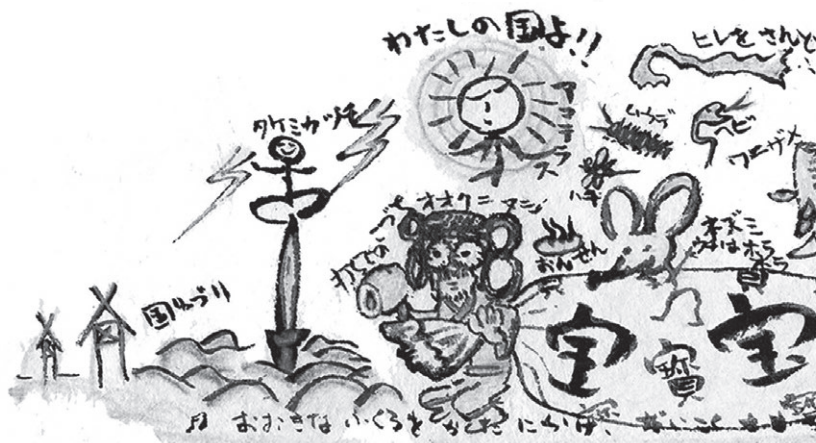
うなるのでしょうか。このお話はなしはまたこの次つぎに。

この後あといたいど



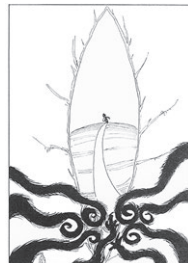
大國主神

いろんなことがあったなあ
 皮をむかれた兔を助けたなあ
 木にはさまれて死にかけた
 焼石を握って死にかけた
 蛇路自足の洞窟にふられた
 野火をはなれて死にかけた
 ネズミに助けられ
 一生懸命に国をやす
 うぼわねたなあ
 いろいろあったなあ
 もう人形よ



第十六話

木の国から根の国へ



ふることに伝う。

赤貝と蛤の女神がやさしく看病してくれたおかげで息を吹き返したおおあなむちは、すっかり元氣になり、鼻唄を歌いながら、山道を歩いておりました。つい先ほどひどい目にあつたということさえ感じさせません。

兄たちは、そのような弟を尻目に、再びおおあなむちを殺す仕掛けをつくるために先回りして走っていききました。そして、大木を切り倒して道をふさぎ、その木をワニの口のように二つに裂いて、間

にくさびを打ち込みました。

そこへ何も知らないおおあなむぢがやって来ました。兄たちは二手に分れてその仕掛けの向こう側から、手を振って「おい、こっちへおいで」とおおあなむぢを呼んでいます。

いちど殺されかけているのに、疑うことを知らないおおあなむぢは、兄たちに追いつこうとして、その木の割れめをくぐろうとしました。

大木の影に隠れていた一方の兄たちは、そのときをねらいすませて「えいっ」とばかりに力一杯くさびを引き抜きました。

ぺっっしゅんこ！

「やったー！」

おおあなむぢは木の間に挟まれて、またまた死んでしまったのです。一度目は焼け石で殺され、二度目は木に挟まれて殺されるとは何と不運なことでしょう。

おおあなむぢの二度目の悲報を知った母のさしくにわか姫は、泣

きながら息子むすこをさがし回まわられました。そして、木きの間に挟はさまれた無残むざんなおおあなむちを見みつけるやいなや、すぐに、木きを裂さいて息子むすこを取り出だし、こんどは自力じりきでなんとか蘇生そせいさせ、

「そなたは、いままで運うんよく命いのちを吹き返かえすことができましたが、ここにいたら八十人はちじゅうにんの兄あにたちについてまでも付け狙ねらわれ、しまいに殺ころされることでしょう」

と告つげました。

そこで母神ははがみは、息子むすこをかくまってもらうために紀き(木き)の国くにに住すむ『おおよびこ』という木きの神かみのところに逃にがしました。おおよびこは、いざなぎといざなみが、おのころ嶋じまでお産うみになった神様かみさまのひとりです。

執念深しゅねんふかい兄あにたちはこのことを知しり、捜さがし追おい、ついに紀きの国くにに隠かくれているおおあなむちを見みつけだしました。兄あにたちはそれぞれ矢やをつがえ、周囲しゅういからせまってきました。

木の神^{かみ}はおやびこは、すぐに、おおあなむぢを『根^ねの国^{くに}』に通^{つう}じている木の俣^{また}（大木^{たいぼく}の根元^{ねもと}にぽっかりと開^あいた大きな穴^{あな}）よりくぐりぬけさせて逃^にがし、その後ろ姿^{うしろすがた}に向^むかつて、

「須佐^{すさの}之男^{のおみこと}の命^{いのち}のいらっしやる根^ねの国^{くに}に行^いきなさい！ 必ず^{かならず}よいように計^{はか}つてくれるでしょう！」

と大声^{おおこえ}で助言^{じょげん}されたのでございます。

おおあなむぢはその言葉^{ことば}を背^せに、根^ねの国^{くに}（死者^{ししや}の国^{くに}）へと一目散^{いちもくさん}に駆^かけ出^だしました。

この木の俣^{また}は『おおやびこ』だけにしか見^みえませんでした。兄^{あに}たちの目^めには、今^{いま}までそこにいたはずのおおあなむぢが、ふいに姿^{すがた}を消^けしたように映^{うつ}りました。

キツネにつままれたような顔^{かお}をしながらも兄^{あに}たちは、八十人^{はちじゅうにん}で手分^{てわ}けして消^きえたあたりを捜^{さが}し回^{まわ}りました。

もちろん木の神^{かみ}であるおおやびこも、大^{おお}きな木^きに姿^{すがた}を変^かえていましたので兄^{あに}たちは見^みつけることができません。それでとうとうあき

らめて帰かえっていきました。

このようなわけで、木の神かみおおやびこは、大難だいなんよけや命いのちを守る神かみ
(紀きの国くにの祖神そしん)として、和歌山わかやま県の伊太祁曽神いたきそじん社じやに祀まつられています。
今いまでも、神隱かみかくしのように姿すがたを消けし去さつてしまおう大きな木きの俣またが、紀き
の国くにの山深やまふかい森もりのどこかにあるということでございます。不思議ふしぎな
ことでございます。

さて、木きの俣またをくぐり抜ぬけたおおあなむちは、まるで時空移動じくういどうで
もしたかのように、あつという間まに根ねの国くにに到着とうちやくしておりました。
根ねの国くにに着ついたおおあなむちは、やがて、須佐之男すさのおの住すむ御殿ごてんに
たどり着つき、門もんをたたきました。

屋敷やしきの中なかから出てきたのは一人ひとりの美しい姫ひめでした。姫ひめの名なはす
せり姫ひめ(須勢理姫すせりひめ)と申もうされました。このお方は須佐之男すさのおの末娘すえむすめ
です。

一目ひとめ見て、すせり姫ひめはおおあなむちを氣きにいつてしまいました。

それはおおあなむぢも同じでございました。

活かつぱつ発はつなすせり姫ひめはすすんでおおあなむぢの手てを取り、人目ひとめを忍しのんで『まぐはひ』しました。そして、おおあなむぢを案内あんないして屋敷やしきへと入はいつていきました。

「須佐すさのお父様とうさま。たいへん麗うるわしい神かみがおいでになっております」

対面たいめんした須佐之男すさのおは、おおあなむぢを見みると、

「この男おとこはわたしの六代目ろくだいめの子孫しそん、

葦原あしはらの色許男しこお（あしはらのしこお）だ」

これは大國主おおくにぬしの二つ目ふための名前なまえで、葦原あしはらの中なかつ國くにから來きたカッコいいやつ、という意味いみでございます。

さてこのお話はなしはまたこの次つぎに。

大屋町古神

ぼくは、災難にあうた、
大國主を助けました。

どうやって助けたか

というところ、それは

ぼくの体にはひみつ

があります。

ぼくの体には大きな

穴がなくてくぐると

大國主へ行けるんです。

それで大國主はくぐって助かりまし

た。私もよくなりました。いまぼくは

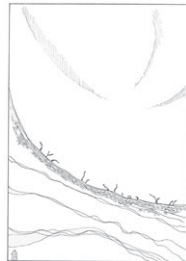
大國主の伊太祁曾神社に住んでいます。

たくさんのお参りに来て下さい。



第十七話
だいいゅうななわ

蛇、蜂、ムカデの室
へび、はち、むろや



ふることに伝う。

須佐之男は、自分の子孫が根の国まではるばると訪ねて来たことを知り、門の中に招き入れました。しかし、娘のすせり姫が一目ぼれしたことを知ると、婿として適切かどうかを判断するために、たいへん厳しい試練を科されたのでございます。

その夜、須佐之男は、たくさんの蛇が這い回っている窓ひとつない部屋に、しこおを連れていき、

「ここで寝ろ」

と命めいじました。しこおは、このような言いいつけに顔色かおいろひとつ変かえず、恐おそろしい『蛇へびの室むろや』へ入はいつていきました。

それをうかがっていたすせり姫ひめは、心配しんぱいでなりません。すぐに自分の部屋へやへと取とつて返かえし、あたふたと戻もどつてきました。そして、須佐すさ之男のおに聞きこえないように、小ちいさな声こえで、

「蛇へびがかみつこうとしたら、この布ぬのを三度振さんどふり、蛇へびを追おい払はらいなさい」

と蛇へびの災わざわいを鎮しずめる呪力じゆりよくのある『蛇へびの布巾ひれ』をこっそり授さずけました。

しこおがそのとおりにあたしますと、不思議ふしぎなことに蛇へびは静しずかになり、おかげでぐっすりと眠ねむることができたのでございます。

次の夜つぎ よるは、毒どくの針はりをもつ『ムカデと蜂はちの室むろや』に入いれられてしまいました。

すせり姫ひめはこんどもこっそりとやつて来て、『ムカデの布巾ひれ』と『蜂はちの布巾ひれ』を授さずけて、

「この布を三度振り、追ひ払いなさい」

と前と同じことを言いました。そのおかげで二日目もぐつすりとお眠ることができ、無事にその部屋からにこにこして出てきたのでございませう。

須佐之男は、刺し傷ひとつないしこおの身体を見て「なんとも不思議なやつ」と思っておりましたが、すせり姫がかげで助けているとはつゆ知りません。

そこで須佐之男は、べつの試練を与えてみることにしました。射ると音の出る『鳴鏑（なりかぶら）』の矢を野原の中に放ち、

「あの矢を取ってこい」

と命じたのです。しこおは、まっしぐらに草むらの中へと走って行きました。

須佐之男は、しこおの姿が見えなくなるのを見届けて、回りから火を放ちました。

炎は、風のあおりを受けてまたたく間に草原中に広がっていきま

す。しこおは、逃げ場を求めて走りまわったのですが、すでに炎と煙は辺り一面を覆いつくしていました。

しこおは、その火の海の中で茫然として立ちつくしておりました。そのとき、足元に一匹の鼠が来て、

「内はほらほら。」

外はすぶすぶ。

チュウチュウ」

と鳴きました。

何だろう？

不思議に思つて鼠の方に近寄つていくと、ドスンと深いほら穴の中に落ち、尻もちをついてしまったのでございます。そのあいだに、炎は頭上をすぶすぶと通り過ぎていきました。

こうしてしこおは、鼠ねずみのおかげで焼やけ死しなずにすんだのです。おまけに、その鼠ねずみは搜さがしていた『鳴鏑なりかぶらの矢や』も持もつてきてくれておりました。矢やの羽はねは鼠ねずみの子こどもたちがかじっていましたけれど、しこおは大喜およろこびでその矢やを受け取とりました。

ところで、矢やの羽はねというのは各部族かくぶぞくや持もつ人ひとによって、それぞれに異ことなつた種類しゆるいの鳥とりの羽はねを使つかっていましたので、その矢やが須佐すさ之男の男のものかどうか見みわけがつかないように、わざと羽はねをかじつたというのが本ほん当とうのところでしょう。

いやはや、鼠ねずみの智恵ちえには感心かんしんしますね。

さて、すっかり焼やきつくされた野原のほらに、すせり姫ひめはぽつんと一人ひとりたつて見ていましたが、焼やけ跡あとに誰だれもいないことを知しると、泣なきながら葬儀そうぎの準備じゆんびを始はじめました。

須佐之男も、婿に迎えるための試練と思つてやったことでしたが「あいつも、ここまでか」と思つて、焼け野原にでて様子をうかがっています。

いったいどうなるのでしょうか？　このお話はまたこの次に。

須勢理媛

蛇の比礼を三回いふと
 へびをおぼらうことが
 出来ました
 蜂の比礼を三回いふと
 ハチをおぼらうことが
 できました。
 白足の比礼を三回いふと
 白かたをおぼらうことが
 できました。



だいじゅうはちわ
第十八話

死者の国からの脱出



ふることに伝う。

死んだと思われたしこおがどうどうと胸を張って、焼け野原の中から、元氣に歩いてくるのが見えました。

すせり姫はすぐに走り寄って、無我夢中で抱きつきました。

しこおは、須佐之男の前にやって来ると、だまって『鳴鶴（なりかづら）の矢』を差し出しました。

「ほうー！」

須佐之男は「なかなかやるやつだ」と感心しましたが口には出し

ません。そこで、三つの試練をりっぱにのりこえたしこおを、ようやく娘の婿として認め、はじめて屋敷の中に招き入れました。

須佐之男は居間にごろりと横になると、しこおを呼びつけ、頭のシラミを取るようと命じました。

しこおは須佐之男の側に寄りました。

そして、頭のシラミを取ろうとしたのですが、ハツとして伸ばしかけていた手を止めました。須佐之男の頭に這い回っていたのはシラミではなく、氣味の悪いムカデだったのです。

しこおはどうしたものかと躊躇しました。

そこですせり姫は、ムカデの色によく似た赤紫色のむくの木の実と赤土をこっそりと渡しました。しこおはその二つを一緒に口に含んでかみ砕き、べつと吐き出しました。

それを見た須佐之男は、ムカデを食いちぎって吐き出しているのだと勘違いして「たのもしいやつだ」と思いながら、安心してぐっ

すりと寝込んでしまいました。

しこおは、いまが逃げるチャンスだと思い、須佐之男の髪の毛をいくつかに束ねて、たる木にくくりつけました。そして五百人がかりでないと動かせない大岩で部屋の入口を塞ぎ、須佐之男が大切にしている根の国の宝物『生大刀』『生弓矢』『天の沼琴』を奪い、せり姫を背負って逃げ出しました。

ところが、二人はとても慌てていたので、天の沼琴が木に触れてしまい大音響が鳴り響いたのです。

驚いた須佐之男は目を覚まし、がばっと跳ね起きました。瞬間、髪の毛に結ばれていたたる木が折れ、寝ていた部屋がぶつ潰れてしまいました。須佐之男はその壊れた部屋の中で髪の毛をもたもとほどこいていきます。

その間に、二人は一目散に逃げました。やつとのことで髪の毛をほどこき終った須佐之男は後を追いはじめました。しかしそのときには

すでに遅く、二人はこの世とあの世の境である、黄泉つひら坂に來ておりました。

そして、須佐之男が黄泉つひら坂にたどり着いたときには、二人は遙か彼方に小さな姿を残すだけとなつておりました。

須佐之男は、遠くの二人に向かつて大声で叫ばれました。

「その生大刀と生弓矢で、お前の兄たちを山の麓や川の瀬に追いやつてしまえ！」

お前は『うつしくにたま（現実世界の王者）』と名のり、この世の王となれ！

わが娘、すせり姫を正妻にして、大國主（おおくにぬし）として國土を治めよ！

宇迦の山の麓にりつばな宮殿を建てるんだ！

高天原の神との約束の印である千木（神社の社殿の屋根の上にある交差させた長い木材）を掲げるのを忘れるなよ！

こいつめ！」

そこで、中つ国にもどつたしこおは、すせり姫を正妻にし、須佐之男のいいつけ通り生大刀と生弓矢で八十人の兄たちを追つ払い、領土を広げ、少しづつ国としての形態を整え、大きな国を作つてゆかれました。

このときについた名が大国主なのでございます。

さて、例の八上姫ですが、約束通り稲葉から呼び寄せて結婚されたのですが、正妻のすせり姫の執ような嫌がらせに恐々として、自分の産んだ子を木の股に挟んで実家へ逃げ帰ってしまわれました。

いつの世も女の争いは恐ろしいものでございます。

ところで木の股にはさまれて取り残された八上姫の子どもですが、ご神木などの木の股に宿る木俣神（きまたのかみ）、またの名を

御井神（みいのかみ）とも呼ばれるようになったこのことでございます。

さてこの後のお話はまたこの次に。

木俣神^{キマツカミ}

勾欄^{コラン}に居ると元氣^{ゲンキ}
に育つ^{ナグ}のよと母^{ハハ}は
そう言^イってどこかに
行^イってしまいました。
私^{ワタシ}の泪^{ナミダ}は泉^{イヅミ}になり
ました。だから御井^{ミヅ}神^{カミ}
とも言^イいます。



だいじゅうきゅうわ
第十九話

すせり姫の嫉妬



ふることに伝う。

葦原の色許男は、須佐之男にいわれたとおり、
次々と国土を広げておりました。

そして、地方の土地を手に入れる度に、その国の美しい娘を妻として迎えるので、正妻で氣の強いすせり姫は面白くありません。
稲葉の八上姫は上手く追い払ったのですが、大国主の浮氣の虫は少しもおさまりません。

あるとき、大国主は、高志の国（北陸）に若くて美しい沼河姫が

いるとのうわさを聞いて、はるばる訪ねて行かれました。

そして、八十人の兄たちを、生大刀、生弓矢で追っ払ったとき
についた英雄としての名前、八千矛（やちほこ）と名のり、独身
の寂しい身だと偽って、長い長い恋文を書かれたのでございます。
最初に姫の家に行ったときは、寢室の前で戸をたたいて歌を捧げ
ても、顔もみせてはくありませんでしたが、二日目の夜には心
を開き、部屋へ招き入れてまぐあわれたのでございます。

それを知った、すせり姫のしつとはたいへんなものでした。あま
りのヒステリーに困り、大国主は妻から逃げ出そうとして、出雲か
ら大和の国（奈良県）へと脱出計画をたてました。

その支度を整えて、馬の鞍に片足をかけながら、妻にこんな歌を
捧げました。

『わたしは 黒や青の衣を着て

まじめくさった僧そうや役人やくにんのふりをして

家いえの中なかにじっとしているのは

似合にあわないんだよ

わたしには 山やまの草くさや木きで染そめた戦いくさの色いろ

赤あかが一番いちばん似合にあっているんだよ

まったく自分じぶんでもほればれするよ

さあ これから

領土りょうどを広ひろげる戦たたかいに出でかけるよ

きつと わたしが出でかけたあとで

しょんぼりするんだろうね

わたしの奥おくさん』

そこで、すせり姫ひめは、美味おいしいお酒さけをなみなみと注そそいだ杯さかずきを
大國主おおくにぬしに差さし出だしながら、こう歌うたいました。

『いさましい八千矛の神よ

わたしのおおくにぬし
大国主さまよ

あなたこそ男の中の男です
おとこ なか おとこ

領土を広げて行く先々で
りようど ひろ さきざき

若い妻をもたれるのでしょうか
わか つま

でも わたしは女の身です
おんな み

あなた以外に夫はないのです
いがい おつと

まあ お酒でも召し上がって
さけ あめ

ふわふわで

やわらかな絹のおふとんの中で
きぬ なか

あわ雪のような
ゆき

わたしの胸や腕をたつぷりと
むね うで

なでさすってください』

と……まあ……このように夫を色じかけで自分のもとに引き止め

てしまわれたのでございます。

というようなわけで、おおくにぬし 大国主は やまと 大和に行くのをとりやめて、おふたり いま 二人は今もおそろいで いずも 出雲の地（いずもたいしや 出雲大社）に なかよ 仲良く しず 鎮まっておられるということでございます。

……と言いましても、すでにこのときまでに、はくじよう 白状されただけでも、むなかたさんじよしん 宗像三女神の ちようじよ 長女の たぎりひめ 多紀理姫、かむやたてひめ 神屋楯姫、とりひめ 鳥取姫、やかみひめ 八上姫、ぬなかわひめ 沼河姫と ごめい 五名の じよせい 女性たちと『まぐはひ』されていたのです。まして こ や子どもに至っては、ひやくはちじゆういちにん 一八一人もいたということです。

たぎりひめ 多紀理姫との間にできた子供、あぢすきたかひこ 阿遲鉏高日子根の かみ 神と したてゐひめ 下照姫。かむやたてひめ 神屋楯姫との間にできた子供、ことしろぬし 事代主などがこの後のお話で活躍されます。

おおくにぬし 大国主は、まさしく「えいゆう 英雄、いろ 色を好む」を ち 地でゆかれたような方で、いま 今も『ふく 福の かみ 神・だいく 大国さま』として、にほんじゆう 日本中の みな 皆さまに した 慕われ あい 愛されておられるのでございます。

ところで、歌をうたい合^あつて恋心^{こいこころ}を語^{かた}るのを『神語^{かむがた}り』というの
ですが、歌^{うた}がうまくないと女心^{おんなこころ}もつかめませんでした。その風習^{ふうしゅう}は、
若い男女^{わかだんじよ}が歌^{うた}を交換^{こうかん}して恋^{こい}を語^{かた}り合^あう『歌垣^{うたがき}』としてのちの世^よに伝^{つた}
わり、やがて、万葉集^{まんようしゅう}や平安朝^{へいあんちよう}の歌人^{かじん}が活躍^{かつやく}し、日本^{にほん}は「歌^{うた}の国^{くに}」
といわれるほどに文化^{ぶんか}が花開^{はなひら}いていったのでございます。

さて、内輪話^{うちわばなし}はこれぐらいにして、この後^{あと}のお話^{はなし}はまたこの次^{つぎ}に。

スリヤヒッ
ツノ 田比 古那 示

ぼくは、^{ヒナ}被^{ヒナ}親^{ヒナ}の羽の衣を着ています。

背丈は親指ぐらいです。

薬草の調合と酒造り、

それから温泉堀りや石の加工

などが得意です。

オオクニ マシ テラス
大國主の手助けを

するために、

イナカミ、ミナミ
天々羅摩船という小さな舟に

乗って出雲の美保崎に

来て来たよ。



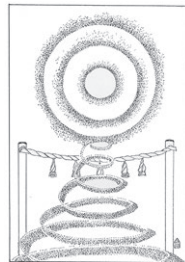
第二十分話

光る船に乗ってきた小さな神

ふることに伝う。

ある日、大国主は、たくさんのお供を連れて出雲の美保の岬を散歩しておりました。すると、沖の方から鏡のようにきらきら輝く小舟が近づいて来たのです。よく見ると、手のひらほどの舟の上に、蛾の皮をまとった、親指ぐらいの小さな神が乗っています。

「だれかなっ？」と思って、大国主は名をたずねたのですが、小さな神は答えようとしません。お供の者にも聞いたのですが誰も知りません。そのとき、



「久延毘古が知っている、グクツ、グフツ」

とひき蛙の『たにぐく』が鳴きました。

『くえびこ』とは、田んぼの中に一本足で立っている山田の案山子のことです。朝から晩までずっと考えごとをしているので、何でもよく知っています。さっそく、従者がくえびこを担いで来しました。

『くえびこ』は、雨や風にさらされてぼろぼろで、悪臭を放っています。

「船の名は『天のかがみ船』。乗りたる人は、かむみむすひの神の子、少名彦那の神でございます」

くえびこは小さな神を一目見るなり答えました。

高天原のかむみむすひの神にたずねると、

「間違いなくわたしの子だ。あまり小さいので指の間よりこぼれ落ちたのだ。おまえは大国主と兄弟のように助け合って、この中つ国をしつかりと発展させていきなさい」

とにこにこ笑って命じられたのです。

以来、二人はなかよく協力して、国造りに精を出しました。

東に、よく日の当たる土地があると聞けば、

行って、農業技術の指導をしました。

西に、住むところに適しているところがあると聞けば、

行って、宅地を造りました。

南に、常世からの湧水が出ていると聞けば、

行って、温泉（道後温泉）を掘り憩いの場を作りました。

北に、病氣で困っている人があると聞けば、

行って、病氣を治す薬である薬酒を調合してあげました。

ところが、中つ国が、豊かに発展していく基礎プランが完成し、
国土開発計画が順調に進み出したとたん、

「じゃあ、あとは頼むよ。僕は本当は薬の方が専門なんだ、もっと
勉強しようと思うから国に帰るよ。ごめんね」

と言いつて、少名彦那すくなひこなは、ぺこんと小さな頭あたまをさげると、するする
と粟あわの葉はつばに登のぼり、粟あわの穂先ほさきからピヨンと飛とんで、海うみのあなたの
常世とこよの国くにへと歸かえつてしまったのです。

この少名彦那すくなひこなが、一寸法師いっすんぼうしのお話はなしの元祖がんそだといわれております。

さあ、大國主おおくにぬしは大弱おおよわりです。広い國土こくどには、まだ發展途上はつてんとじょうのところ
が多く残のこっています。

「ああ、どうしよう。こまった、こまった」とウロウロしては、
腕組うでぐみして「だれか力を貸かしてくれないかなあー」

と嘆なげいておられました。そのとき、

「わたしの神靈しんれいを祀まつれば、國造くにづくりに力を貸かそう。さもなくば國造くにづく
はうまくいかぬぞ」

という声こえが聞こえてきたのです。

振り返かえると、まばゆい光ひかりに包つつまれ、海うみの上うへを歩あるいて近寄ちかよつてく
る神かみがおりました。その白光びやつこうはあまりにも強つよく、とても目めを開あけて

いられる状態じょうたいではありません。大国主おおくにぬしは、ただびっくりして何も答こたえることができませんでした。すると光ひかりの中なかからもういちど声こえが聞こえました。

「わたしを大切に祀まつれ。そうすれば助たすけてやろう」

大国主おおくにぬしは、どうしても助けが必要ひつようだったので、

「どのようにお祀まつりすればいいのでしょうか？」

と問とわれました。するとその光ひかりる神かみは、

「大和やまとの青々あおあおとした三輪山みわやまの頂上ちようじようにわたしを祀まつり、身みを清きよめてお仕つか

えせよ」

と答こたえられたのです。この神かみは大物主おおものぬしの神かみで、今いまも人々ひとびとから「み

いさん（蛇へび）、みいさん（蛇へび）」と親したしまれ、大和やまとの国くに（奈良なら県けん）の

大神神社おほみわじんじやに鎮しずまっておられます。

神社じんじやの背後はいごにある三輪山みわやまの山頂さんちようには、古代信仰こだいしんこうの祀まつり場ばである

石座いわくらがあり、山やまそのものをご神体しんたい（神奈備山かなびやま）として大切たいせつにお祀まつり

しているのです。三輪みわの山やまがときどき光ひかりるとうわさされるのは、こ

ういうわけがあるからでございます。

さて、おおくにぬし 大國主は、言いわれたとおりにひか 光る神 かみ 大物主を おおものぬし 三輪山に みわやま 祀まつると、なか 中つ国は くに みるみるうちに さか 栄え、みづ 水は ゆた 豊かに わ 湧き、あし 葦が生い お 茂り、いね 稲は ふうど たわわに た 実り、み 豊作が つづ 続いたのでございます。このすばらしい風土を称え、なか 中つ国 くに (日本) は、

『とよあしはらのちあきのながいほあきのみずほのくに 豊葦原之千秋長五百秋之水穂国』とも呼よばれました。

ここまではめでたしめでたしでございました。

しかし、たかあまはらす 高天原に住すむ天照大御神が、

「とよあしはら 豊葦原の みずほ 水穂の くに 国は、わ 我が子 こ 『まさかつあかつかはやひあめのおしほみみ 正勝吾勝々速日天忍穂耳』が とうち 統治すべき くに 国である」

と突然 とつぜん こんなことを せんげん 宣言されたのです。

さて、いったいどうなるのでしょうか。このお話 はなし はまたこの次 つぎ に。

多通具久

ぼくはひきがエシの

谷ぐくです、よくしゃべります。

水をくぐったり、谷をくぐったり

して遊んでいます。

おお国主の

お供をしています。

ぼくは毒を持っています。

さわるなでね。

あと、栗山子の子ぐさびと友達です。



だいにじゅういちわ
第二十一話

たかあまはら
高天原からの使者



ふることに伝う。

「豊葦原の水穂の国（美しい日本の国）は天つ神であるわたしの
息子が治めるべき国です！」と宣言した天照大御神は、さっそくあ
めのおしほみみ（天忍穗耳）を、高天原から下界へと送り出しま
した。

おしほみみは『天の安の河』で天照大御神と須佐之男が『う
けひ』したときに、天照大御神の左の髪飾りから産まれた長男
です。

「では行いつてまいります」

おしほみみは、はりきつて出でかけていきました。しかし、だんだんと心こころ細こまくなつてきたのでしよう、ちよつと天あめの浮橋うきはしに立たち寄よつて下界げかいのようすをうかがつておりました。

「おやつ？ 何なにかへんだぞ」

ざわざわと騒そう々ぞうしい物音ものおとが聞きこえてきます。不安ふあんになつたおしほみみは、下界げかいに行くいくのを急きぎよ取とりやめてもどつてきました。そして、天照大御神あまてらすおみかみに、

「わたしがくるのを喜よろこんでいない国くにつ神かみがさわいでいるようです」と報告ほうこくしたのでございます。

息子むすこの報告ほうこくをうけた天照大御神あまてらすおみかみとたかみむすひの神かみは、天あまの安やすの河原かわらに八百万やおよろずの神々かみがみを集あつめて高天原会たかあまはらかいぎ議ひらを開ひらくことにしました。

このように、高天原たかあまはらでは、ことあるごとに皆みなに呼よびかけて全ぜん体たい会かい議ぎを開ひらきます。神々かみがみは昔むかしからとても民主みんしゅ的てきだったのでございます。

さて、天照大御神は、八百万の神々をゆつくりと見渡しながらか
を大に^{だい}してたずねました。

「葦原^{あしはら}の中^{なか}つ国^{くに}は、わたしが、父^{ちち}いざなぎの命^{みこと}からおあづかりした
国^{くに}です。しかしそのことをよく思^{おも}わない、国^{くに}つ神^{かみ}たち^がうるさく騒^{さわ}
いでいるようです。そこで、反^{はん}対^{たい}している神^{かみ}々^{がみ}を^をな^なん^なと^とか服^{ふく}従^{じゆ}させ
たいのですが、誰^{だれ}を使^し者^{しや}に送^{おく}れば良^よい^いで^でし^しう^うか？」

会^{かい}場^{じやう}がざわざわと揺^ゆれ動^{うご}きます。しばらくして、

「おしほみみの弟^{おとうと}、天^{あめ}の菩^ほ卑^ひの神^{かみ}を使^{つか}わ^わせ^せま^まし^しう^う。か^かれ^れな^なら^ら人^{ひと}あ
たりよく、ま^まず^ず争^{あらそ}い^いな^なく^く無^ぶ事^じに役^{やく}目^めを果^はた^たす^すと存^{ぞん}じます」

高^{たか}天^{あま}原^{はら}一^{いち}の知^ち恵^え者^{しや}で^でた^たか^かみ^みむ^むす^すひ^ひの神^{かみ}の^の子^こ、思^{おも}金^{ひかね}の神^{かみ}の^の発^{はつ}言^{げん}です。
会^{かい}場^{じやう}がしんと静^{しず}まり返^{かえ}ります。

しばらくして賛^{さん}成^{せい}の拍^{はく}手^{しゆ}が方^{ほう}々^{ぼう}から沸^わき上^あが^がり^りま^ました。満^{まん}場^{じやう}一^{いつ}致^ち
で決^きまり^りです。

そんなわけで、まず天照大御神あまてらすおおみかみの次男じなん、天あめのほひが下界げかいへと降くだつていかれたのです。ところが、天あめのほひは、中なかつ国くにがとても居心地いごこちが良よかったので、結婚けっこんし家庭かていを持もつて住すみ着ついてしまったのです。それで、三年さんねんたつても何なんの連絡れんらくもしてきません。

そこで、またもや高天原会議たかあまはらかいぎがひらかれました。

「天あめのほひは、どうやら大国主おおくにぬしに懷柔かいじゆうされて、国くにつ神かみの味方みかたになつてしまったようです。つぎはだれを使者ししやに送おくればいいでしょう？」

天照大御神あまてらすおおみかみは皆みなを見渡みわたしたずねました。

「それでは高天原たかあまはらいち一の美男子みだんし、天あめのわかひこわかひこ（若日子わかひこ）をやりましたよ。彼かれなら武道ぶどうにも長たけており、すでに妻子さいしや家族かぞくもここにあるので、まず間違まちがいありますまい」

思金おもひかねの神かみが提てい案あんしました。そして誰だれの反はん対たいもなくすんなりと決議けつぎされました。

そこで天照大御神あまてらすおおみかみはわかひこに、狙ねらつたものは必かならず外はずすことのない『マカコ弓ゆみ』と大蛇だいじゃでも簡単かんたんに殺ころせる『ハハ矢や』をお与あたえになつ

て下界へと送られたのです。

ところが、わかひこは、おおくにぬし むすめ大国主の娘で天上界にも比べるものがないほどの美人、ひめしたてる姫（下照姫）と結婚されて、のちのち後々は自分じぶんが中つ国の王になろうと考えたのでした。それで、はちねん八年が過ぎてても何の報告もしてきません。

そんなこんなで、たかあまはらかいぎまたもや高天原会議が開かれました。

「わかひこが何も言ってきません。誰をやればその理由を聞いたですることができるでしょう？」

あまてらすのおみかみ天照大御神は少しイライラしながら、あつ集まった神々に問われたのです。その瞬間、しゅんかん おもひかね思金の神と八百万の神々は口をそろえて叫びました。

「キジの鳴女をやりましょう！」

さて、『キジの鳴女』とはいったいどんな女なのでしょう。このお話はまたこの次に。

アメノホヒノカミ
天菩比神

ぼくの母さんは
あまてらすそ
ゆいます。

ぼくは母さんの

右の耳に飾りの勾玉から生まれたぞ。
五人兄弟の次男です。



『母^{ママ}さんがあの国^{クニ}は私^{ワタシ}のくににたか
 ら近^{カサエ}してもらってきなさい』
 とゆうので
 出^{イデモ}雲^{クモ}の国^{クニ}へ行^イって大^{オオ}国^{クニ}主^{ニヌシ}と
 お話^{ワタ}してたら良^ヨいトだた
 ので、そこに住^スむことにしました
 すごいりばな家^イも造^{ツク}ってもらい
 ました。
 左^{ヒダリ}の国^{クニ}の如^{ごと}く玉^{タマ}よりうまれた^{うまれた}兄^{ケイ}さん。アノオシホミの^{オシホミ}

第二十二話
だいにじゅうにわ

キジの鳴女
なきめの

ふることに伝う。
つた

下界に降りたまま八年間^{はちねんかん}なんの報告^{ほうこく}もしてこないわかひこのもとへ、キジの鳴女^{なきめ}を送^{おく}ることが決^きまりました。そこで、天照大御神^{あまてらすおみかみ}はキジの鳴女^{なきめ}を呼^よび、

「わかひこのところへ行^いって、

『凶暴^{きようぼう}な国^{くに}つ神^{かみ}どもを服従^{ふくじゆう}させよと命^{めい}じてあるのに、八年^{はちねん}もの間^{あいだ}に
いったい何^{なに}をしているのか』

その理^り由^{ゆう}を問^といただしてきなさい」



と命じて、使者に出されました。

キジの鳴女はさっそく下界へ飛び、わかひこの屋敷の桂の樹の枝に止まりました。

「ワカヒココヒカワ。カノルイテシヲニナナニヲシテイルノカ？ ケーン、ケーン」

とキジの鳴女はかん高く鳴き、天照大御神の言葉を、かくかくしかじかとつぶさに告げたのでございます。

わかひこはキジの言葉は理解できませんが、心をさぐることできる霊能の強い女『あめのさぐ女』がそばで聞いており、

「この鳥の鳴き声は不吉です。射殺してしまいなさい」

とわかひこの耳にささやいたのです。

わかひこはすぐにマカコ弓をビュンと引きました。矢はキジの鳴女の体を見事につらぬき、そのまま高天原まで、一直線に上がっていききました。

その頃、高天原では、天照大御神と高木の神（高皇産巢日の神）が、キジの鳴女の報告を待っていました。その目の前に矢が突き立ちました。

高木の神は、矢に血がついているのを見つけ、

「この矢は、わかひこに授けたハハ矢である」

と一同の神々に見せ

「もしも、わかひこがわたしたちに忠実で、この矢を悪い神に向けて射たのならわかひこに当たるな！　もし謀反の心があるのならわかひこに当たれ！」

と言って、飛んできたときに開いた穴から下界めがけて突き返したのです。

矢は、明け方に流れ星のように猛スピードで落ちてきて、寝ていたわかひこの胸板にぐさりと深く突き刺さりました。

『敵が射た矢を射返すと必ず当たる』という還り矢の言い伝えはこのことから始まったということです。

それともう一つ、行つたきりで歸つてこないということを『きじの片使い』と言います。

さて、愛しい夫の突然の死に、妻のしたてる姫は号泣してしました。泣き声は風と共に鳴き響いて、高天原に残していたわかひこの父や妻や子どもたちにまで届きました。そして皆下界に降りてきて、したてる姫と一緒になつてさめざめと泣いたのです。

葬儀の準備が始められました。まず、死体を安置する喪屋が作られました。そして、

『翡翠』の姿に變じて、死者のお供えを作る役、

『雁』の姿に變じて、食べ物や盛った器を、うなだれて運ぶ役、

『鷺』の姿に變じて、ほうきを持つて魂を掃き寄せる役、

『雀』の姿に變じて、臼で米をつく役、

『雉』の姿に變じて、泣き女をする役、

それぞれが与えられた役を演じて、八日八夜のあいだ大宴会を開いて遊び興じました。

こうすると、死者の靈魂が還つてくると信じられていたのですが、しかし鳥の姿に変装して遊び回るとは、何とも変わった葬儀でございす。

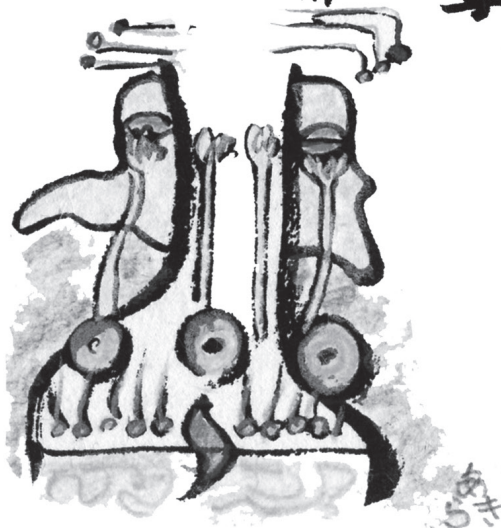
さてこのつづきはまたこの次に。

天佐見売

名前のとおり 神意や人のこころを
探るのがとくいな巫です。天若日子

のやさしきで働いていました。

ある時やさしきの庭の村の木の枝に雉が
止まりやうかに鳴き
ました。不吉な声



だったので若日子にその
ことを伝えました。
若日子は弓矢で雉を射殺しました。
矢は雉をつき抜けて空高く上
り、また戻ってきて若日子に
ささりました。若日子は
びっくりしました。

第二十三話

空とぶ船

ふることに伝う。

『雁』『鷺』『翡翠』『雀』『雉』の姿で泣いたり笑ったりして遊ぶ、奇妙な葬儀が八日間つづいていきます。そこへ、したてる姫の兄、あぢすきたかひこね（阿遲鉏高日子根）がとむらいにやって来ました。その顔、形は、死んだわかひこにうりふたつでございました。

わかひこが生き返った、と勘違いした高天原の妻と父は、
「あなた！」



「おお！ 息子が生き返った！」

と叫び、あまりの嬉しさに、たかひこねの足に取りすがったので驚いたのはたかひこねです。

「いったいどういうことだ！ 親友だからとむらいに來たのだ。それを、けがれた死人と間違えるなんて！」

とひどく腹をたてました。

もともと怒りっぽい性質だったのしょうか、カツ、となったたかひこねは、鋭い剣を振り回して葬儀のために建てた喪屋を切り倒し、足で蹴飛ばし、ふいとどこかへいつてしまわれました。喪屋はひゅーんと美濃の国（岐阜県）まで飛んでいつて、喪山という山になつたそうでございます。

葬儀会場はもうめちやくちやです。

「あれはわかひこじやなかったのか？」

「だれなんだ？」

突然のできごとに、皆は啞然としておりました。

それで、妹いもうとのしたてる姫ひめが、誤解ごかいのないようにと、たかひこねの名前なまえを歌うたによつてあきらかにしました。その声こえは玉たまを転ころがすようなすずしい音色ねいろでした。

あめなるや おとたなばたの
うながせる たまのみすまる
みすまるに あなたまはや
みたに ふたわたらす
あぢすきたかひこねのかみぞ

天上てんじょうの 織姫おりひめたちの首飾くびかざり
その美うつくしき 穴玉あなだまは
二つふたの 谷たにをつらぬきて
強つよく輝かがやく雷神らいじんの
阿遲あぢ鉏すきた高か日子ひこ根ねの神かみですよ

とこんな風に、その正体が玉と同じように光り輝いている強く
大きな龍神で、雷神なのですと知らせました。この歌がひなぶ
(夷振)で民謡の初まりとなりました。

たかひこねの神は迦毛の大御神とも呼ばれており、大国主と
須佐之男の長女のたぎり姫の間に生まれた長男です。この神は大和
(奈良県)の葛城の高鴨神社に祀られております。

さて、天のほひ、天のわかひこ、キジの鳴女、と送った高天原の
使者たちはことごとく失敗です。天照大御神は、またまた高天原
会議を開かれ、

「こんどはどの神を遣わせば良いでしょう」

といささか氣落ち氣味にたずねられたのでございます。思金の神
と八百万の神々は慎重に相談をし、やっとひとつの意見がまとまり
ました。

「こんどは武力をもつて当たらせましょう。そこで、天の安の河上の岩屋にいる劍の神、いつのおははりが適任と思われれます。もしくはこの神の子どもである、たけみか雷を遣わしましょう。彼ならまず間違ひありません。しかし、いつのおははりは、天の安の河の水をせき止めておりますので、だれもそこに行くことができません。それで、天のかぐ（光の神）を使いに行かせましょう」

言い終わつた瞬間に、もう天のかぐは使いにたち「息子のたけみか雷に行かせましょう」という返事をもらつて歸つてきておりました。

そこで、天照大御神は、空を自由自在に飛べる『天の鳥船』を添えて、たけみか雷を下界へと送りしました。

こんどはうまくいくでしょう。このお話はまたこの次に。

鳥^{トリ}え石^{イッ}楠^{クス}船^{フネ}神^{ノカミ}

ぼくは山^{イワ}で出来^{デキ}て
います。

神^{カミ}さまが天^{テン}上^{ジョウ}界^{カイ}と
下^ゲ界^{カイ}への移^イ動^{ドウ}に



ふきあ

使うので大変
 いそがしいです。
 けど楽しいです。
 雷の神さまも垂せました
 饒速日の命も垂せました
 今日も大空を翔けて
 います。

あめのとけね
 とりのいわてりね
 あめのとけね



だいにじゅうよんわ
第二十四話

くに
国ゆずり

ふることに伝^{つた}う。

バリバリッ^{みみ}と耳^{みみ}をつんざくような雷^{らい}鳴^{めい}がとどろいて、たけみか雷^{づち}と天^{あめ}の鳥船^{とりふね}が、天^{あま}つ神^{かみ}の最後^{さいご}の使者^{ししや}として、出雲^{いずも}の稲佐^{いなさはま}浜^{はま}に降^{くだ}ってきました。

「なにごとか!」

おおくにぬし
大國主^{おおくにぬし}はびつくりして浜^{はま}にとびだしてきました。

見^みると、剣^{けん}を逆^{さか}さまにして波^{なみ}の上^{うへ}に立^たて、切^きっ先^{さき}の上^えにあぐらを
かいて座^{すわ}り込^こんだ、たけみか雷^{づち}がおりました。目^めをぎらぎらさせて、



大国主をにらんでいます。そして、

「おい、大国主。おまえが治めている中つ国は、天照大御神の御子が統治することに決まった。いますぐ国を譲れ！」

と大声でつめよりました。声は雷のようにビリビリと中つ国中に響きわたります。

あまりにもぶしつけな言葉に、大国主は驚いたのですが、へいぜんとした顔で答えました。

「わたしの国は、どうの昔に戦もやんで、いまではのどかに歌で治まっている国です。今さら刃物では争いたくありません。どうしても国が欲しいというのなら、息子の事代主（えびすさん）に答えさせましょう。しかし今は残念ながら、鳥を追ったり美保の岬で鯛釣りをして遊んでいるのでここにはおりません」

それを聞くと、天の鳥船がすぐに飛んでいき、事代主を連れてきました。事代主はたいへんおだやかな性格なので、

「この国を譲れ！」

と脅おどされると、

「いいですよ。天あまつ神かみに差し上げますよ」

とおとなしく引き下ひさがったのです。そして、たけみか雷づちに見えなように体からだのうしろで手てを打うって呪のろいをかけ、船ふねから海うみへと飛とび込み、海草かいそうの茂しげる中なかへもぐり込んでしまわれました。

この事代主神ことしろぬしのかみは出雲いずもの国くに（島根県しまねけん）の美保神社みほじんじやにお祀まつりされております。また神戸こうべの長田神社ながたじんじや、西宮神社にしのみやじんじや、大阪おおさかの今宮戎神社いまみやえびすじんじやなどにも祀まつられ、えびずさんとして人々ひとびとに広ひろく親したしまれています。

さて、海うみに消きえた事代主ことしろぬしを見みとどけた、たけみか雷づちは、よゆうで笑わらっています。

「わはは。事代主ことしろぬしは降参こうさんしたぞ。ほかに、俺おれにたてつくようなやつはいるか」

「もう一人ひとりの息子むすこ、たけみなかたがおとなしくは引ひき下さがらないでしょう」

この問答もんどうをしているうちに、たけみなかたが、五百人ごひやくにんがかりでないうごと動かすことのできない大岩おおいわを、軽々かるがるとかついでのしのしとやってきました。

「だれだ。こそこそと話をはなししているのは。なに？ 中つ国なかくにをもらいに来たきだ。そんなことは俺おれと力比べちからくらをしてから言え！」
と言うやいなや担かついでいた大岩おおいわを放り投げ、たけみか雷づちに戦たたかいを仕掛けたのでございます。

たけみなかたが、むんずと敵てきの腕うでを握にぎったかと思おもうと、その手は不思議ふしぎにも氷こおりに変わかっていました。おやつ？ と思おもつて引ひつ込こめると、またもとの腕うでにもどつています。
ふたたび握にぎると、こんどは切れ味のいい劔つるぎに変わかつており、それをつかんでしまったのです。慌あわてて手てを離はなすと、これはあなどれないと思おもつたのか後あとずさりを始めました。

たけみか雷づちは、

「こんどは俺の番だ！」

と大声で吼え、若芽でも摘むようにいとも簡単に、たけみなかたをぶんと遠くへ投げ飛ばしてしまいました。

力は互角だったのですが、技においては、たけみか雷の方が一枚上手でした。そして、逃げていくたけみなかたを、信濃の国（長野県）の諏訪湖まで追いつめ、殺してしまおうとしました。たけみなかたは、脅えながら命ごいをしました。

「どうか殺さないでくれ。この諏訪の土地から一步も出ないと約束する。父の命令に従う。兄、事代主の言うことも聞く。天つ神の御子がこの国を望むなら差し上げる」

ところで、たけみか雷との戦には負けたたけみなかたですが、諏訪では狩猟と農耕の大明神として、上社と下社に祀られています。また諏訪神社では、七年に一度、樹齢数百年の神木を切り出し、その丸太の上に男たちが競い合って上り、坂の上からすべり降りる

勇壮な奇祭、『御柱祭』がたいへん有名でございます。

この『御柱祭』は、山の神が巨木とともに里に下り、人々が神と出会うという祭りなのです。

一方、争いに勝ったばかりか雷は、茨城県の鹿島神宮に武道の神、軍神として祀られています。また一説には、千葉県の香取神宮のご祭神（経津主神）も、たけみか雷と一緒に天降り、大国主に国譲りを迫って活躍したと伝えられています。

さて、国譲りはどうなっていくのでしょうか。そのお話はまたこの次に。

事代主神

お父さんは大国主です

お母さんは神屋楠比売です

ぼくは神さまの言葉を聞くことが出来ます

あまてらすの仮いの者が来て
て国をやずれと言っているが
どうだろうかと思いが

ぼくに聞くので

神さまにたずねました。

やずれと言っているよと
伝えました。

魚つりが大好きです。

えべっさんと呼ばれます



第二十五話

天孫降臨

ふることに伝う。

戦に負けたたけみなかたは、天つ神に国をゆずることを誓い、お母さんの沼河姫の住む諏訪に閉じこもってしまいました。たけみか雷は、得意顔で出雲にもどつてくると、大国主に、

「おまえの子どもたちは、天照大御神のおおせに従うと約束した。おまえの返事は」

と威圧的に聞いてきました。大国主は、もともと心がおおらかなので、



「子どもたちの申すとおおり、この葦原あしはらの中なつ国くには、おゆずりしましょう。そのかわり、わたしに、天照大御神あまてらすおおみかみが住すんでいるようなりっぱな宮殿きゆうでんを造つくってください。そして、天あまつ神かみの子孫しそんが栄さかえていくのと同じように、わたしの子孫しそんも絶たえることのないようにしてください。その約束やくそくの印しるしである『神かみの火ひ』を燃もやし続つづけてください。そうしてくださるなら、すみやかに隠居いんきよいたします。わたしの子こである百八十ひやくはちじゅうの神々かみがみは、事代主ことしろぬしに仕つかえていますので天あまつ神かみにそむくことはないでしょう」

このように、非暴力主義ひばうりよくしゆぎをつらぬいた大国主おおくにぬしのおかげで全面戦争ぜんめんせんそうにならずに少すこしの小競り合こげあいだけで国くにゆずりに無事決着ぶじけつちやくがついたのです。

たけみか雷づちの神かみが、大国主おおくにぬしの願ねがいを天照大御神あまてらすおおみかみに伝つたえますと、快こころよくゆるされたので、さつそく出雲いずものたぎしというところに大国主おおくにぬしのために宮殿きゆうでん（出雲大社いずもたいしゃ）を造つくられました。

出雲大社は大社造りと呼ばれるりっぱな建物で、太くて大きなしめ縄が目を引きます。昔この社殿は高さが一六丈（四八m）もある、雲を突くような高層建築だったのでございます。

さて、新しい宮殿の前ではお祝いの宴がもよおされています。水門の神の子孫、くし八玉の神が料理をつくり並べました。それが終わりますと、こんどは鵜に化けて海底の粘土を取り、祭式に使う皿を作りました。

つぎに、ワカメの莖を刈って火きり臼を作り、ホンダワラの莖を刈って火きり杵を作り、聖なる『神の火』を起こし、そして、良い言霊のたくさん入っためでたい祝詞を唱えて大国主を祝福されました。

天つ神たちは大国主の子孫や文化を打ち壊してしまわずに大切に保存し、国つ神たちの伝統や習慣も伝えていきました。

こんな風にして大国主が治めていた中つ国は、天つ神が治めるこ

とになりました。

これが後世に伝わる国ゆずりのお話でございます。

天照大御神は、国ゆずりが無事に終わつたことをたいそう喜び、もう一度我が子おしほみみを呼んで命じました。

「いま中つ国を平定したと報告があつた。すぐにくだつて豊葦原の水穂の国をおさめなさい」

ところが、おしほみみの命が下界にいく準備をしていたとき、思金の神の妹の、たくはたちぢ姫（栲幡千千姫）との間にちようど二柱の子供が生まれました。天照国照彦火明の命（にぎはやひの命）と日子番能邇邇芸の命（ににぎの命）です。

「新しく生まれた下の子、ににぎの命を行かせようと思ひますがいかででしょうか」

「それは名案！ 新生の若々しい子を天降らすことは、たいへん縁起のいいことです」

あまてらすおおかみ
天照大御神は、すぐに、ににぎの命を呼び、

「ににぎの命、そなたに豊葦原の水穂の国をおさめることを申しつける」

とあらためて命じられました。

このような次第で、孫のひこほのににぎの命が天降ることとなりました。

ににぎとは、太陽の恵みを受けて稲穂がにぎにぎしく豊かにみのあるという意味の名前でございます。

また、ににぎの命はこの時まだ生まれたばかりの赤ん坊だったので、ふわふわの絹と麻の二種類のお布団（真床覆衾）に包まれていたというところでございます。今も、大嘗祭では、真床覆衾を真似てこの時の様子を再現する秘儀が伝わっています。

また一説によると、兄のにぎはやひの命は、十種の神宝を携えて大和の国の嵯峨峰に天降られたというお話も伝わっています。

さて、このお話はまたこの次に。

アメノホアウリノミコト
天火明命

アマテルクニテルヒツ
天照国照彦火明櫛王

ニギハヤヒノミコト
饒速日命
というのが正式

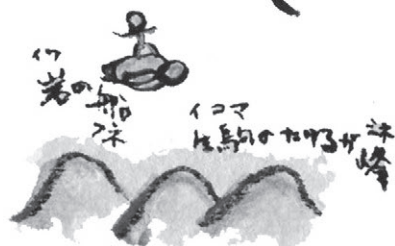
ナマエ
なま前でず

みんな「ほあかん」って
ウ



あま

コにギはやむとカ言います
 死者をも甦らせらる呪いのある
 十種神寶というお札を持って
 高天原から天磐船に乗て
 天降て来たよ



だいにじゅうろくわ
第二十六話

猿田彦とあめのうずめ
さるたひこ

ふることに伝う。

ににぎの命は天界から天降っていく道中で、不思議な神に出会いました。そこは『やちまた』といって、いくつもの道に分かれたところですよ。

その道の真ん中で、通せんぼをするように、輝き光る大男が立っていたのでございます。この、正体不明の大男の体から発する光は、上は天界を、下は下界のすみずみまで明るく照らしています。背丈は見上げるほどもあり、鼻が非常に長く、目は赤くららん



と輝き、見るからに異様な雰囲気だだよっています。

天照大御神と高木の神は不審に思い、

「正体を確かめてくるように」

とあめのうずめの命を派遣しました。あめのうずめは、とても女らしくて色っぽいのですが、芯がしっかりして勝ち氣な神です。自分よりも数倍もある大男の前に立ち、斜に構えて豊かな胸をあらわに腕組みし「ふん！」とにらみつけました。

すると大男は、あわてて正座し、

「わたしは国つ神、猿田彦です。天孫ににぎの命が天降られると聞きましたので、道案内をしようと思い、おむかえに参りました」

とていねいに頭をさげて答えました。

天照大御神はたいそう喜び、猿田彦をにぎの命の先導としてつけくわえました。

このようなわけで猿田彦は、道案内の神、道祖神となり、また、祭りの神輿の先導役をつとめて、天狗の格好で現れるようになった

のでございます。

ほかに、ににぎの命みことにつき従したがう神かみは、岩戸開いわとひらきのときに活躍かつやくした、

あめのこやねの命みこと、ふとだまの命みこと、あめのうずめの命みこと、鏡かがみ作つくりのい

しこりどめの命みこと、玉造たまつくりのたまのおやの命みこと、の神事しんじをつかさどる五神ごしん。

そして、思金おもひかねの神かみ、手力男たちからおの神かみ。

さらに、穀物こつもつの神かみ、とようけ（登由氣）。門もんを守る神かみ、いはとわけ

（石戸別いはとわけ。別名べつめい櫛石窓くしゐまど）たちです。

そして、天照大御神あまてらすおおみかみは皇位繼承こういけいしんの印しるしである三種さんしゆの神器じんぎをににぎの

命みことにおわたしになりました。

岩戸開いわとひらきのときに使つかった

『八尺やさかの勾玉まがたま』

『八咫やあたの鏡かがみ』。

八俣やまたのおろちを退治たいじしたときに尾おから出でてきた

『草くさなぎの劔つるぎ』でございす。

それらを手渡すときに、

「これからは、この鏡をわたしだと思つてたいせつに祀りなさい。

思金の神は、ににぎの命の知恵となつて政治の手助けをなさい」と
命じ、従者一人一人にも「たのみましたよ」という目を向けられた
のです。

この鏡は、いまま伊勢の内宮、五十鈴の宮に大切に祀られており
ます。

こうしてすべての準備が整つて、ににぎの命の、

「出発！」

という合図と共に、神々は高天原の石座を離れて、八重にたなび
く雲をかき分けて、一路下界へと、にぎやかに進んでいかれたので
ございます。

下界へ降りる道中は、ににぎの命にとっては始めて見るものばか
りでした。

「この白いものは海月か？」

「いえいえ、星雲でございます」

「このふしぎなものは何か？」

「天の浮橋でございます」

「おつ、このふかふかしたものは？」

「浮き島でございます」

ににぎの命はこの浮き島に夕日を浴びてお立ちになりました。

その姿があまりにもりりしいので、神々は感動のあまり、

「おおっ！」

と深いため息をもらしました。

さて、一行はいよいよ中つ国に到着し、九州は宮崎県の高千穂の久士布流岳に降りられました。

そこには、刀や弓矢で武装した、あめのおしひの命、あまつくめの命が待つており、ここからはこの二人が先導することになりました。

しばらく歩かれて、くしふる岳の頂上に着いたにぎの命は、遠くを眺めて、

「ここからは韓国岳が見晴らせ、薩摩の国（鹿児島）の笠沙の岬にも近い。朝日はまばゆく、夕日もたいへん素晴らしい。ここは山の幸海の幸に恵まれた本当に吉き地だ」

と喜んでここにりっぱな宮殿を建てられたのでございます。

さて、この後のにぎの命のご活躍はいかに。このお話はまた次の次に。

猿^{サル}田^タ毗^ヒ古^コ神^{カミ}

ぼくは大男^{オオオトコ}です。

身長^{シンチヨウ}が十二メートル^{ジュウニメートル}あります。

鼻^{ハナ}が一メートル^{イチメートル}あります。

目^メが真^{マコ}赤^{アカ}です。

天^{アメ}宇^ウ受^{ノウ}売^ズが

ぬき^{ヌキ}です。

道^{ミチ}案^{アン}内^{ナイ}が仕事^{シゴト}です。



だいにじゅうななわ
第二十七話

このはなさくやひめ いわながひめ
木花之佐久夜姫と石長姫



ふることに伝^{つた}う。

高千穂^{たかちほ}の峰^{みね}に天降^{あまくだ}り、宮殿^{きゆうでん}を建^たてたににぎの命^{みこと}は、月日^{つきひ}がたつにつれて貫禄^{かんろく}がついてきています。ある日^ひ、あめのうずめを呼^よんで、

「猿田彦^{さるたひこ}の神^{かみ}を郷里^{ふるさと}の伊勢^{いせ}までお送^{おく}りいたせ。それから、猿田彦^{さるたひこ}の名^なをおまえが継^ついで、お仕^{つか}えいたせ」

と命^{めい}じられたのです。

初^{はじ}めての出会^{であ}い以来^{いらい}すっかり猿田彦^{さるたひこ}と仲良^{なかよ}くなっていたあめのう

ずめは、喜んで伊勢まで猿田彦を送り、新婚旅行のような楽しい旅をされました。

そしてこれ以後、あめのうずめの子孫は、猿田彦の一字をもらい受け『猿女の君』と呼ばれて、宮廷で舞樂を奉仕する官女となったのでございます。

さて、猿田彦を無事に送り届けたあめのうずめは、笠沙の岬にもどってきました。その岬で、たい、ひらめ、うに、ほたて、たこ、いか、まぐろ、とびうお、すずき、ちようちんあんこう、ナマコなどすべての種類の魚を呼び寄せました。

「お前たちは、ににぎの命の食べ物としてお仕えするか」と言う問いに、魚たちは皆、

「お仕えます」

と答えたのですが、ナマコだけはだまっただままで、何も言いません。怒ったあめのうずめは、

「この口はほんとうに何もしゃべらないのかい！」
と小刀を取り出して、ナマコの口を裂いてしまったのです。ひどい
いはなしですが、今でもナマコの口の裂けているのは、あめのうず
めのせいだと言われております。

一方、伊勢の国に帰った猿田彦ですが、うわさによると、あざか
という所で漁をしていて、とても大きい『ひらぶ貝』に手をはさま
れたまま海に引きずり込まれてしまったらしいのです。

水中に溺れて沈んだ猿田彦の魂は、三つに別れて神霊となりまし
た。

海の底に沈んだときに現れたのが、そこどくみたま（底度久
御魂）。

海の中ほどで現れたのが、つぶたつみたま（都夫多都御魂）。

水面で現れたのが、あわさくみたま（阿和佐久御魂）ということ
でございます。

ところで猿田彦さるたひこですが、助たすかったのか、死しんでしまったのかは
まったくわからず、ことの真相しんそうは謎なぞにつつまれたままでございま
す。

猿田彦さるたひこは伊勢いせの国くに（三重県鈴鹿市みえけんすずかし）の椿大社つばきだいしゃや伊勢市いせしの猿田彦さるたひこ
神社じんじや、二見浦ふたみがうらの興玉神社おきたまじんじやにお祀まつりされています。

さて、うらかなある日ひ、にぎの命みことが笠沙かささの海岸かいがんを歩いており
ますと、花はなのように美しい乙女おとめに出会であいました。

「あなたはどこの娘むすめさんですか」

につこりとにぎの命みことが問といますと、娘むすめは、

「おおやまつみ（おおやまつみ）の神かみの娘むすめ、このはなさくや姫ひめ
（木花之佐久夜姫このはなさくやひめ）と申もうします」

としおらしく答こたえます。

「兄弟きょうだいはありますか？」

「姉あねがおります。いわながひめ（石長姫）と申もうします」

「わたしはあなたとまぐはひ（結婚）たいと思うのだが」

「わたしには答えられませんか。父ちちに聞いてみてください」

と突然とつぜんの求婚きゆうこんにとても恥はずかしそうです。

後日ごじつ、ににぎの命みことは大山津見おおやまつみの神かみに使者ししやを遣つかわしました。これを聞いた大山津見おおやまつみの神かみはたいへんな喜びよろこぶようです。すぐにたくさんの贈り物おくものを持たせ、二人ふたりの姉妹しまいを一いっしよ緒しょにして、ににぎの命みことのもとへと嫁よめに送り出だしました。

ににぎの命みことは大喜おおよろこびで二人ふたりの姫ひめを迎むかえました。しかし、姉あねの石長姫いわながひめがとでも醜みにくい顔かおをしていたので、

「おまえは帰かえれ！」

と親元おやもとにつき返かえし、美しいうつくこのはなさくや姫ひめだけを屋敷やしきに留とどめて、一夜いちやのまぐはひをされました。

一方、追おい返かえされて家いえに戻もどった石長姫いわながひめは、自じ分の部屋へやに閉とじこもつたまま二に度どとお姿すがたを見みせることはありませんでした。

父親ちちおやの大山津見おおやまつみの神かみは、姉あねが送り返おくされてきたことをたいそう悲かなしみ、つらく思おもい、ににぎの命みことに呪のろいの言葉ことばを送おくりました。

さてどうなっていくのでしょうか。このお話はなしはまたこの次つぎに。

石長比売

わたしはちょっとぶさいくな
 神です。このまえ、自分の
 顔を鏡に映しました。
 びっくりして鏡を投げ
 ずてました。

父の畑山津見神社へ
 あそびに行きました。

雪が降り風が吹いても

岩のごとく不変であるように
 と言いました。わたしは延命長寿
 の守り神らしいです。うれしいです。



だいいにじゅうはちわ
第二十八話

かちゅうしゅっさん
火中出産

ふることに伝う。

顔が醜いという理由で、姉の石長姫を送り返してきたにぎの命のもとへ、父親の大山津見の神は使者を遣わしました。

その手紙には、

——二人の娘と一緒にさしあげたのには深いわけがあったのです。石長姫を妻にすれば、あなた様のお生命が、雪が降り風が吹いても岩のごとく不変であるようにと。



このはなさくや姫ひめを妻つまにすれば、あなたの御代みよが花はなが咲さき誇ほこるごとく栄さかえるようにと。

そう神かみにうけひ（誓約せいやく）していたのです。しかし、姉あねの石長姫いわながひめを侮辱ぶじやくして追おい返かえし、妹いもうとだけを愛めとられたので、あなたのお生命いのちは花のようにすぐに散ちつてしまうことでしょう――

このときから人ひとの寿命じゆみようが短みじかくなつてしまつたと言いうことでござい
ます。

それからしばらくの月日つきひが流ながれ、このはなさくや姫ひめは、ににぎの
命みことの前まえに出でて、

「わたしはあなたの子供こどもを身みごもりました。ちやうど産うみ月づきなので
すが、尊とうとい方かたの御子みこをこつそり生うむわけにはいかないので、認にんち知ちを
して下ください」

とうれしそくに話はなされました。ところがににぎの命みことは、

「たった一夜ひとよで妊娠にんしんしたというのか？ その子こはわたしの子こでは

あるまい。きつと国くにつ神かみの子こに違ちがいない」

と姫ひめを疑うたがつたのです。

このはなさくや姫ひめは、まさかこのような言こと葉はが返かえつてくるとは思おもつていませんでした。身みに覺おぼえのない疑うたがいを晴はらすために、窓まどのない大おおきな産屋うぶやを作つくらせて中なかに入り、出で口ぐちを土つちで塗ぬり塞ふさいでしまわれしました。

「このおなかの中なかの子こが、もしあなた以い外がいの子こどもであつたなら、産うむときに無ぶ事じではいられないことでしょう。もしあなたの子こどもであつたなら、無ぶ事じに産うまれてくることでしょう」

と神かみに誓ちかわれて、産屋うぶやに火ひを放はなち、その火中かちゆうで子こどもを産うんだのです。

火ひが燃もえ始はじめたときに生うまれた子こどもが、

ほでり（火照ほでりの命みこと）。

火ひが燃もえさかつているときに生うまれた子こどもが、

ほすせり（火須勢理ほすせりの命みこと）。

火が弱よわまってきたときに生まれた子どもが、

ほおり（火遠理ほおりみことの命）。

こうして三人さんの男の子おとこを無事に産み終えて、ににぎの命みことの御子みこであることを立派りっぱに証明しやうめいされたのです。

火ひの中なかで産うむとは、なんともすさまじいお産さんでございます。このことから、このはなさくや姫ひめは、安産あんざんの守り神まもがみとして信仰しんこうされるようになりましした。そして、火ひを噴ふく神聖しんせいな美しい山やま『富士山ふじさん』の神靈しんれいとしてしずかに眠ねむっております。

姉あねの石長姫いわながひめは、父ちちの大山津見おおやまつみのいる瀬戸内海せとないかい・大三島おおみしまの大山祇おおやまつみ神社じんじやの摂社せつしや・阿奈波神社あなばじんじやに延命長寿えんめいちやうじゆの守り神まもがみとして、ひっそりと暮くらしておられます。

一説いつせつによると石長姫いわながひめは、鏡かがみに自分じぶんの姿すがたを写うつし見て恥はじ入り、その鏡かがみを山中さんちゆうに投げ捨てたというのでございます。その鏡かがみと石長姫いわながひめは宮崎県西都市みやざきけんさいとしの銀鏡神社しろみじんじやに祀まつられております。

また、ににぎの命は鹿兒島県の霧島神宮や、川内市（鹿兒島県）の新田神社にもお祀りされており、裏山にある可愛（えな）山稜にはお墓があるとのことでございます。

それから何年かして、長男のほでは海幸彦という名で、魚を獲って海の民として暮らしておりました。末っ子のほおりは山幸彦という名で、山や野にでて狩りをし、山の民として生活しておりました。

ある日、弟の山幸彦が、兄の海幸彦に、「たまには道具を取り替えて獲物を捕りましょう」と提案をしたのです。しかし、海幸彦は、弟が何度たのんでも首を振るばかりでした。

このお話はまたこの次に。



大山津見神

こんにちにはぼくは大山津見です。

瀬内海の大島という処に住ん

でます。星のすべての山の総大将です。

だからとてもえらいんです。

十二月十二日になると

山の木の数をぼくは

かぞえるのでこの日は山

に人がなぞ下さない。もし入ったら

木になぞしまいます。

あと山に遊んだりする人がいるけど、あれは

山に住んでる大戸或神という

迷いの神のせいです。ぼくではないです。



だいにじゅうきゅうわ
第二十九話

うみさちひこ やまさちひこ
海幸彦と山幸彦

ふることに伝^{つた}う。

おとうと やまさちひこ
弟の山幸彦は、

「兄^{にい}さんお願^{ねが}い、道具^{どうぐ}を取^とり替^かえましよう」

と一度^{いちど}、二度^{にど}、三度^{さんど}……としつこく言^いってきます。そのたびに

兄^{あに}の海幸彦^{うみさちひこ}は首^{くび}を振^ふるのですが、山幸彦^{やまさちひこ}はどうしてもあきらめませ

ん。とうとう海幸彦^{うみさちひこ}は根^{こん}負けし、つい^{ついに}に交^{こう}換^{かん}する^{しやうち}ことを承^{しょう}知^ちしま

した。

やっこのことで釣^つり道具^{どうぐ}を貸^かしてもらった山幸彦^{やまさちひこ}は、大喜^{およろこ}びで海^{うみ}



へとかけだしました。海幸彦はしかたなく狩りへと出かけましたが、
氣ものらないので、獲物も獲れません。山幸彦はというと、一日中
釣り糸をたれていたのですが、さっぱり釣れません。そのうえ、
大切な釣り針を失くしてしまったのでございます。

日暮れに帰ってきた山幸彦に、海幸彦は、

「道具の交換はもうやめにしよう。ほら」

と言つて不機嫌に弓矢を返しました。山幸彦はうなだれて、

「……兄さんごめんなさい。釣り針を失くしてしまいました」

と肩を落として力なく答えました。海幸彦はそれを聞くと、たい

そう怒り、どうしても返してくれと山幸彦を強く責めました。

困った山幸彦は、自分の大事な刀を細かく砕いて五百本の釣り針

を作り、海幸彦に渡したのですが許してくれませんか。そこで今度は

一千本の釣り針を作つて持つていったのですが、

「刀で作つた釣り針など欲しくはない！ 骨で作つたあの靈力の

ある釣り針はりでないかと絶対ぜったいにだめだ」

と言う返事へんじが返かえってくるばかりでございます。

海うみに失なくした釣り針はりをどうやって探さがせようか……。と途方とほうに暮くれて海岸かいがんで泣ないていると、海流かいりゅうや風向かざむきや天気てんきなど、海うみのことならどんなことでも知しっている塩しおつちの翁おきなが白しろくて長いひげをゆさゆさ揺ゆらしながらやってきました。

「ほつ。日の神ひのかみの子孫しそん、山幸彦やまさちひこではないか。なにを泣なき悲かなしんでいるのか？ ほつほつ」

と聞きくので、今いままでのことをすっかり話はなすと、

「それはお困こまりのこと。善よきことをお教おしえしましょう。ほつほつほつ」

と笑わらいながら砂浜すなはまにあぐらをかいて座すわり込みました。そして、翁おきなが、

「ほつ」

と言いうと、によきと一本いっぽんの竹たけが砂浜すなはまにはえてきました。

「ほつ。ほつ」

と二度にどい言いうと、二本にほんの竹たけがはえてきました。

「ほつ」によき。

「ほつほつ」によきによき。

「ほつほつほつ」によきによきによき。

翁おきなが「ほつ」と言いうたまびに竹たけがはえてきます。

いつの間まにか砂浜すなはまにはりつぱな竹たけやぶができておりました。つぎに翁おきなは、

「これぐらいでよかろう」

と言いったかと思おもうと、目めにも止とまらない素早すばやさで竹たけを切きり始はじめました。

「よつこらしよ」

と翁おきなが砂すなのうすわえに座すわったときには、細ほそくきれいに切きりそろえられた竹たけが翁おきなの前まえに積つんでありました。翁おきなはその竹たけを一本いっぽんづつ手てに取とり

素早く編み始めました。すると籠のような小舟がたちまちのうちにできておりました。

その舟は『間無勝間の小舟』といって、細い竹をすき間なく固く編んだ舟で、絶対に水が入ることはありません。

そして山幸彦をその竹舟にひよいと乗せ、

「わたしがこの舟を押し流しますと、海の道に沿ってかなたまで運ばれますのでしばらくそのままおいでなさい。やがて海藻の森の中に銀色に照り輝く不思議な宮殿が姿を現します。海神、わたし（綿津見）の神の住む龍宮です。

その門に着いたならば、美しい水の湧き出る泉のそばに、良い香りのするかつらの木があるので、登って待っていていなさい。きっと海神の娘が、あなたを見つけて相談にのってくれるでしょう。ほっほっほっほっ

と言い、舟を押し出されました。

舟は潮に乗りどんどん流されていきます。やがて、塩つちの翁が
いったとおりの不思議な宮殿が現れ、吸い寄せられるように門に流
れ着きました。どこからともなくかぐわしい香りが漂ってきます。
山幸彦は小舟を降りて泉のそばの桂の木に登り、枝に座って待つて
おりました。

すると、海神の娘、とよたま姫（豊玉姫）の侍女がきれいな器を
持つて水を汲みに現れたのでございます。

いったいどうなつていくのでしょうか。このお話はまたこの次に。



火遠理命 ホナリノミコト

ぼくはホオリの命と
 言います。みんなは
 ぼくのことを山幸彦と
 呼びます。
 兄の海幸彦の大事に
 していたつり針を
 失くしてしまったので
 海の国にやって来たよ。

だいさんじゅうわ
第三十話

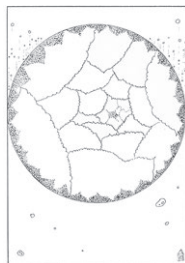
りゅうぐうじょう
龍宮城

ふることに伝^{つた}う。

木^きの上^{うえ}に山幸彦^{やまさちひこ}がいるとは知ら^しずに、侍女^{じじよ}は泉^{いずみ}の水^{みず}をくみ始^{はじ}めま
した。そのとき、なにやら光^{ひか}り輝^{かがや}く人影^{ひとかげ}が水面^{すいめん}にゆらいでいるので、
不思議^{ふしぎ}に思^{おも}って桂^{かつら}の木^きを見上^{みあ}げました。

「水^{みず}を頂^{いた}けるでし^だょうか」

木^きの上^{うえ}から凜^{りん}とした声^{こえ}が降^ふってきます。



侍女は驚いたのですが、枝に座っている若者がとても美男子だっ

たので、いわれるままに器に水を入れて差し出しました。

山幸彦はその水を飲まずに、首にかけていた白い玉（真珠）をはずして口に含み、器の中にぷつと吐き出しました。すると玉は器の底にぴたりとくっついたのです。

侍女がいくら玉をとり出そうとしても、どうしても取れません。どうしようかと少し迷ったすえ、しかたなくそのまま、とよたま姫のところ運んでいったのでございます。

「門の外に誰かいるのですか？」

とよたま姫は器の中の美しく光り輝く白い玉を見て、「高貴な方しか持つことができない玉がどうしてここに？」と不思議に思いたずねました。侍女は、

「泉のそばの桂の木の枝に、とっても凜凜しい若者が……」

と水を差し上げたことなど、これまでのいきさつを話したので

す。

とよたま姫は、赤い糸に引かれるように、すぐに外に出て若者に会いました。二人はじつと見つめ合い、一目で恋に落ちたのでございます。

とよたま姫は父のわたつみの神に、

「御門にすごく麗しい方がおられます」

と告げました。

わたつみの神が出て会われますと、

「この御方は日の神の子孫、火遠理の命、山幸彦なのである」

と答えて、さっそく宮殿の中へ招き入れました。

その歓待はたいそうなもので、アシカの毛皮を幾重にも敷き、さらに絹の敷物を何重にも敷いて、その上に山幸彦を座らせました。

金、銀、珊瑚、真珠で飾られた品物、たくさんのごちそうをずら

りと並べ、婚礼の宴が催されました。そして山幸彦をとよたま姫の

夫として、大切に迎えたのでございます。

龍宮城では、タイやヒラメが舞い踊り、毎日のように珍しい宴会が開かれました。とよたま姫は夫のためにおいしい手料理を作りました。二人はまわりもうらやむほどの仲のよさです。

山幸彦は夢心地でした。なぜ自分がここに來たのかもすっかり忘れてしまったのです。

いつしか夢幻のうちに三年の月日が流れ、ある日ふと、山幸彦は釣り針のことを思い出し、大きなため息をひとつきました。すると、今までと打って変わって、笑顔がみるみる消えていきました。口数も少なく、元氣もありません。

とよたま姫は原因がわからず心配でなりません。それで父のわたつみの神に、夫の様子を伝えました。

わたつみの神もいたく心配されて、

「娘がわたしのところへたったいま來まして、

『三年の間ずっと楽しく遊び暮しておられたのに、今夜大きなため息をひとつつかれた』

と申してきました。何か事情がおりになるのでしょうか。またここに來られたのには何か深いわけがあるのではないのですか」

とたずねました。

山幸彦はしよんぼりとして、ここに來たことの一部始終を語りつくし、兄に、失った釣り針をどうしても返せと責められていることを話しました。

じつと聞いていたわたたつみの神は、すぐにたくさんのお魚たちを呼び集めて、

「お前たちの中に、釣り針のことを知っている者はいないか」と問われました。すると、もろもろのお魚たちは、

「鯛が、以前からのどにとげが刺さって、ものが食べられないと嘆いております」

と口をそろえていいました。

さていったいどうなるのでしょうか。このお^{はなし}話はまたこの^{つぎ}次に。

大綿津見神

ぼくは海の神です。

伊耶那岐と伊耶那美がぼくを産んでくれしました。だいたい竜宮の国

の近くにいます。

海の魚はぜんぶぼくの友達です。鮫

も友達ですが一度かまれ

ました。そして泣きました。

竜宮に遊びに来たときはぜひ

声をかけて下さいね。

おみやげをあげるよ。



第三十一話
だいさんじゅういちわ

塩みつ珠、塩ふる珠
しお たま しお たま

ふることに伝う。
つた

魚たちの話では、鯛が釣り針を飲み込んでいるのではないかということです。そこで、わたつみの神が鯛を呼び、のどを調べてみますと、やはり釣り針が引つかかっていたのでございます。

そして、釣り針を取り出して洗い清め、山幸彦に戻し、

「この釣り針を、兄の海幸彦に返すときに、

この釣り針は、

『おぼ釣（ぼんやりとなる釣り針）』



すす釣ち（心こころがすすさんでくる釣つり針はり）

まぢ釣ち（貧ますしくなる釣つり針はり）

うる釣ち（愚おろかになる釣つり針はり）

と呪文じゅもんをとなくて、後うしろ向むきに手渡てわたしなさい。そうすると魚さかなは

一匹いっぴきも釣つれなくなります。

それから、海幸彦うみさちひこが高たかい土地とちに田たんばを作つくったなら、あなたは低ひく

い土地とちに作つくりなさい。低ひくいところを選えらんだなら、あなたは高たかいとこ

ろを選えらびなさい。

わたしは水みづを自由じゆうに操あやつることができるので、海幸彦うみさちひこのところには

水みづを送おくらないようにしましょう。そうすれば、海幸彦うみさちひこは三さん年のあ

いだずつと貧まずしい暮くらしが続つづくでしょう。

すると海幸彦うみさちひこがあなたを恨うらんで、必かならず戦せん争そうをしかけてきます。そ

のときにこの二ふたつの珠たまを使つかいなさい。

一つは『塩しおみつ珠たま』といつて洪水こうずいを起おこすことができますので、

溺おぼれさせてしまいなさい。

もし助けを乞うなら、もう一つの『塩ふる珠』を使えば水を引くことができます。

このようにして、水を自由に操り悩ませるならば、海幸彦はきつとあなたに服従することでしょう」と言つて二つの珠をおみやげに渡しました。

そして、わたつみの神は、海に住むわに鮫を全員呼び集め、「日の神の御子、山幸彦どのが陸地へ帰られることになった。陸までお送りせねばならない。お前たちのうちで、陸まで何日で行つて歸つてこられるのか申し出なさい」

わに鮫たちは、それぞれが体の長さに応じて日数を計算して答える中に、スピード自慢の一尋わに鮫が進み出て、

「ばくなら一日で行つて歸つてこれるよ」

と答えました。

人が両手を広げた大きさを一尋と言うのでございます。

それを聞いたわたつみの神は、

「ではおまえに任せよう。海を渡つていくときに、恐ろしい目にあ

わすのでないぞ」

と言いつけて、山幸彦を背に乗せ、陸まで送らせたのでござい
ます。無事海岸に着いた山幸彦は、お礼にと自分の懐剣をわに鯨に渡
しました。サメの歯が鋭くなったのは、このときからだということ
でございます。

さて、山幸彦は、わたつみの神に教えてもらったとおりの呪文を
となえて、後ろ手に海幸彦に釣り針を返しました。すると、兄は、
魚をまったく釣ることができなくなり、田んぼも不作続きとなり、
どんどん貧乏になっていったのです。

海幸彦はこれはぜんぶ山幸彦のせいだと恨んで、攻めてきまし
た。しかし山幸彦は『塩みつ珠』を使って洪水をおこし溺れさせ
ます。「助けてくれ！」と悲鳴を聞けば『塩ふる珠』を使って水を

引かせます。助けるところずに襲つてき、襲つてくるとまた水を操つて翻弄させ、何度もなんども繰り返し、海幸彦を痛めつけたのです。

海幸彦は、ついに降参して、

「山幸彦よ。これよりのちは、守護人となつておまえに仕えよう」

と約束されたのでございます。

この勝利で、山幸彦がにぎの命の後継者と決まり、海幸彦の子孫である隼人は宮廷警護人として仕え、今でも、新天皇が即位される大嘗祭のときには、このときのことをのちの世に残すために『塩みつ珠』『塩ふる珠』で翻弄され、溺れるさまを、身ぶり手ぶりを交えておもしろおかしく演じるのでございます。

ところで、妻のとよたま姫は、ある日、龍宮を出られて、夫である山幸彦のところにやつて来ました。

「貴方の子供が産まれますう！」

いったいどうなるのでしょうか。このお話はまたこの次に。



佐比持神^{サヒモチノカミ}

コガタナ
小刀のことを佐比^{サヒ}て

言うよ。山幸彦^{ヤマサチヒコ}に

コガタナ
小刀をもらったので

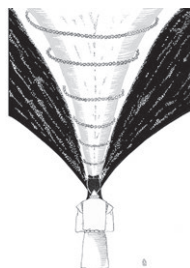
ぼくの歯^ハは鋭^{スルト}くな、

たんだ。ワニ^{ザメ}魚^{イサ}って呼^ヨ

ばれることもあるよ。

だいさんじゆうにわ
第三十二話

とよたまひめ
豊玉姫とわに鮫ざめ



ふることに伝う。

龍宮からはるばると、夫の国までやって来たとき、

「わたしはあなたの子どもを身ごもり、いま臨月を迎えました。天

つ神の御子は海で産むわけにはいきませんので、こうしてやって来

たのです」

と訪ねて来たわけを告げました。

そして、波打ち際にせつせと産屋を建て始めたのです。鵜の羽で

屋根を葺き、あと少しで完成というときにとよたま姫は急に産気づ

き、葺きかけの屋根をそのままにしてあわてて侍女といっしよに産屋に入られました。

しばらくして、産屋の中から、とよたま姫の声が聞こえてきました。

「龍宮では、子どもを産むときにはもとの姿に戻って子どもを産みます。だからけつして見ないでください」

山幸彦は不思議に思ったのですが、妻に言われたとおり外で自分の子どもが生まれるのを、そわそわしながら待つておりました。

初めてのお産なのでかなり時間がかかりそうな様子で、産屋の中からは陣痛に苦しむとよたま姫のうめき声と、姫を励ます侍女の声が聞こえてきました。

「姫さま、しっかりなされませ。水中出産されれば、もっと楽にお産ができますものを。わたしが心配したとおり難産になつてしまいました。代われるものなら、代わつて差し上げたいのですがこれば

かりは……」

「いいえ、大丈夫です。山幸彦さまの御子を水中で産むわけには参りません。どんなに苦しくてもわたしは、陸上でりっぱに子どもを産んで見せます。うつ、うつ……」

山幸彦は氣がきではありません。それに、もとの姿にもどって産むと言った姫の言葉も頭から離れません。山幸彦は心配のあまりこつそりと中の様子をうかがいました。

ところがそこにとよたま姫の姿はありません。そればかりか、八尋（約十四、四m）もある大きな大きなわに鰻が、くねくねと動めいて、苦しそうにお産をしていたのでございます。見覚えのあるやさしい目からは、大粒の涙が流れていました。

山幸彦は仰天し、あわてふためいて逃げだしました。

夫にほんとうの姿を見られたことを知ったとよたま姫は、いたくお嘆きになられ、

「わたしは海の道を通つてあなたの許へ通おうと思つていましたのに……。はづかしい……。」

と、玉のような男の子を砂浜に産み残し、龍宮への通い路を塞いで歸つてしまわれました。

海辺に残された子どもの名前は、産屋作りの一部始終を物語つて、

波打ち際に建てる／鵜の茅葺きの／いまだ作り終えず、という意味の波限建鵜葺草葺不合の命と名づけられました。

宮崎県の日向灘を望む鵜戸神宮の岩窟の中にある社殿の裏側では、乳房に似た岩から清らかな冷水がしたり落ちております。きっと子を思うとよたま姫の母乳であろうと人々は言い伝えています。

一方、龍宮へ歸つたとよたま姫は、自分の姿を盗み見た夫をお怒りになつてはいましたが、恋しい夫を忘れることができません。そ

れで、子どもの養育という理由で、妹のたまより姫（玉依姫）を夫のもとへ送りました。そのときに、歌を託されました。

赤玉は 緒さへ光れど

白玉の 君が装し

貴くありけり

赤い玉は糸も光つてきれいだけれど わたしは貴方と初めて
出会ったときに見た 貴方の分身である あ白い玉（真珠）を忘
れることができません

それを聞いた山幸彦は妻を恋しく思い、

沖つ鳥 鴨どく島に

わが率寝し 妹は忘れじ

世のことごとに

まぶたに残った玉の島 寄り添い暮らした夢の島 命の限り忘れ
ません

と伝えたのでした。

山幸彦は高千穂に五百八十年間住み、お墓はその西側にあるとい
うことでございます。そして、山幸彦とよたま姫は今も宮崎県の
青島神社や鹿児島県の鹿児島神社に仲良くお祀りされております。

人とわに鮫の子どもであるふきあえずの命は、育児に來た母の
妹のたまより姫を妻にして『いつ稲の命』『稲ひの命』『御食ぬ
の命』『若御食ぬの命』の四人の男の子をお産みになられました。
末っ子の『若御食ぬの命』が、のちの神武天皇で、またの名前をか
むやまといわれひこ（神倭伊波礼彦）とも言います。

それから月日もたつたある日のこと、
三男の『御食ぬの命』は海の上を飛ぶように渡り、遙か彼方にあると噂されている常世の国へ探険に行きました。

次男の『稲ひの命』は母方のふるさとである龍宮へと旅だつて行きました。

後に残つた長男の『いつ稲の命』と末っ子の『若御食ぬの命』の二人は平安な土地を求めて東に向かつて旅立ち、途中、カメの背に乗つて釣りをしている老人に出会うという不思議な大冒険が始まるのですが、この後のお話はまたの機会に譲りましょう。

これでひとまず神代の巻はおしまいです。

大昔の神々のお話はいかがでしたか？

今のあなたたちの生活と、神々の生きていた時代の暮らしぶりが、あまりにもかけ離れておりますので『古事記』のお話が、どれだけ

うまく伝えられたか、阿礼は心配しております。でも、神代のご先祖が居られたからこそ、あなたたちが産まれたのでございます。

ご先祖は、地球がおのずからころがり自転していることや、銀河系宇宙の外に更に大きな別の天（宇宙）が存在していることも太古から知っておられたのです。

日本には、こんなにすばらしい神話があるのです。世界にもたくさんのお神話が残っています。自分たちの神話を忘れた民族は滅びます。だから決して忘れないでくださいね。

いまでも夜空を御覧ください。天の川のほとりでは、八百万の神々が集まって『高天原会議』を開き『おのころ嶋』の行く末を案じておられることでしょう。

阿礼は千三百年ぶりに『古事記』を楽しく語らせて頂きました。こんどは、あなたが子どもたちに語り伝えてあげてくださいね。

あ！

き・みが代は

千代に八千代に

さざれ石の 巖と成りて

苔のむすまで

この歌は、いざなぎといざなみ「き・(男)・み・(女)」が、仲むつ

まじく『みとのまぐはひ』をして子どもを産み、いついつまでも

「き・(男)・み・(女)」の子孫が繁栄して、平和が末永く続きます

ようにと石長姫さまが『子孫繁栄』の祈りを込めて唄った歌なので

ございます。

新しい二十一世紀に生きる、いざなぎといざなみの皆さん。仲良

く『まぐはひ』して良い子をたくさん生んでくださいね。

王^{タマ}依^{ヨリ}比^ヒ売^メ

わたしの姉^{アネ}は豊王^{トヨタマ}比売^{ヒメ}と

います。ひとめぼれした

山幸彦^{ヤマキヒコ}との由に子供ができた

のですが、サメだった

ことがばれてし

まて子供をお

いたまき童宮^{ワカミヤ}

に戻^{もど}つきました。

それで、わたしが、姉のユイ
を亡くしました。

すくすく育つて、良い男になりました。
わたしと結婚しました。
♡



ウサギ
の命

小林晴明さん、宮崎みどりさんとの出会い

(二〇一九年令和元年 五月)

小林晴明さん、宮崎みどりさんとは、僕が政府刊行物大阪サービスステーション在職中からのお付き合いだ。知り合ったのは、僕が官報公告係から、政府刊行物書店部門の責任者となり、さらには子会社である「かんぼうサービス」を任された、まさにそのときであった。僕はといえば、子会社を任されるにあたって、国が出した本を書店に卸すだけではおもしろくないと、この「かんぼうサービス」を拠点に出版事業に手を出した。それも「オーダーメイド出版」という、自費出版と企画出版がドッキングしたような出版形態で、企画時点から、その本の予約募集を行い、ある程度の部数が集まれば出版に踏み切ろうというスタイルだ。

この出版を初めた頃、「二万部以上を自費出版で売ったすごい人がある」——そんな話題が耳に入ってきた。人文関係の本と言えば、三〇〇〇部売れたら上々の出来、そんな時代の話。それもまだまだ売れ続けているということ、ちなみに今回の二〇刷りで六万部というから驚きだ。そして、この本の著者が、小林晴明さんと宮崎みどりさんであった。

当時、「大阪官報ビル」の管理も任されていた関係で、その空き室を利用し、月に一度、「アジア塾」という催しも運営させてもらっていた。この催しに、お二人を招き「自分の本は自分で売ろう!」というセミナーを開催してもらったのだ。

普通、自費出版で本を出そうという人は、本をつくることには熱心だが、本が出来た時点で完結してしまい、本を売ること、読んでもらうことには力を入れない。良い本は書店に並べさえすれば勝手に売れると錯覚しているのだ。この錯覚をお二人に打ち破っ

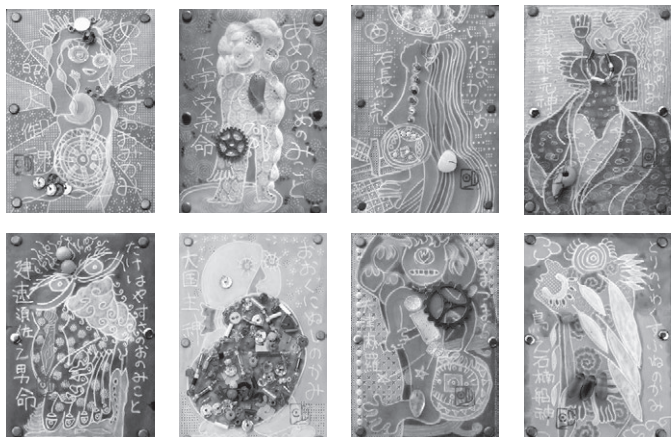
でもらおうというセミナーだったが、お二人に続く人は、僕の知る限り未だ現れていない。

それはさておき、小生、定年退職後、南河内の大宝というところへ引っ越すことになった。ところが、なんと、この地にお二人も既に引っ越しされていたのだ。

不思議な縁だと思った。この縁がもとで、小林晴明さんの「古事記の神さま」を、ネパールの手漉きみつまた紙で作成するに至った。お札の原料みつまたがネパールで自生しているというので、かんぼうサービスの時代、この仕事にも関わらせていただいていた。これら縁が絡みあつての仕事であり、その縁が、今回の「古事記のものがたり」二〇刷りのお手伝いへとつながったという次第だ。「紙」と「神」がつながった、なんとも不思議な縁だと思っている。

(編集工房DEP 桐生敏明)

神かみ霊ふだ札 kamifuda



小林晴明の多彩な想像世界、八百万の神々のカード

作者あとがき

(一九九九年四月二十七日)

子供のころから「神話や謎にみちた未知の世界へのあこがれ」が強く、アニメズムや古神道に興味をもち、故小林美元氏に師事して古い神社や山上の岩くらなどをたずねて、二人で探険して歩いていました。

そんな私たちに、『日本の神話・古事記の世界』をインターネット上で連載する仕事が舞い込んできました。

若い人、特にゲーム世代・インターネット世代に向けて、わかりやすい古事記を書くというのは、とても難しいことに思えたのですが、一話、二話と話を書き進むにつれて「神話を忘れた民族は滅びます。どうか『古事記』を人々に伝えていって下さい」という稗田の阿礼のささやきが私たちに聞こえ出したのです。

書き進むにつれて、若い人だけではなく団塊の世代といわれるかなりの年齢の人たちまでもが「日本の神話」を知らないということにも気づきました。

パソコンを持つていない友人、知人たちにコピーを渡し読んでもらうと、「おもしろくて読みやすい。ぜひ『古事記』のものがたり』を本にして欲しい」と、出版出来ることを楽しみに応援してくれるようになりました。

私たちはいつしか、この仕事は天が与えて下さったに違いないという確信に近い思いが芽生えてきました。

しかし残念ながら名もないライター二人が書いた本を世に出してくださる奇特新出版社はどこにも見つかりませんでした。

そんなわけで、私たちはついに意を決し、一冊、一冊、この本を自分たちの手で製本することにしたのです。

何もかも機械化、量産化される世の中で、作者みずからが注文を受けて一冊ずつ手作りするなんて、少しばかげた話かもしれませんがいまはこのアイデアが二人ともかなり氣にいつています。

そう思つて四冊の本を家で手作りしたのですが、これがなかなか大変な作業である上にコストがばかにならないということに氣が付きました。

とりあえずできあがつた四冊をもつて皆様に見て頂いているうちに、神様のお導きとしか考えられないありがたいご神縁をいただいたのです。

さまざまな紆余曲折がありました、結局私たちは二人で小さな出版社をつくり、まず三千部を出版することを決心致しました。

全国のご縁の頂ける神社にお伺いして『古事記のものがたり』を社務所に置いて頂くと思つております。

私たちに大きな勇氣と希望を与えて下さった、伊勢神宮崇敬会の事務局長、奥重視様（現伊太祁曾神社宮司）と、高天原の天照大御神様、おおよびこの神様に心からの感謝を申し上げます。

最後になりましたが、とてもステキなイラストを描いて下さった荒木尚美さん、本当にありがとうございました。
（一九九九年中秋の名月の日に）

第七刷り改訂にあたつて

(二〇〇四年十月の新月の日に)

一九九九年十月満月の日、たくさんの方々のお援を頂いて『古事記のものがたり』を出版してから五年が経ちました。この本が世に出て以来、紙面では語りつくせないほどの不思議な出会いや出来事がありました。

私たち自身も驚いているのですが、日本中の何人もの読者の方々が、この本をお友達に紹介して広めてくださっています。中には私たちのホームページを見た海外在住の日本人の方が「こんな判りやすい面白い古事記を探していました！」というメールを頂いたりもしています。

また、多くの神職の方々が「日本の神さまのことを知ってもらうには、この位かみ砕いてまず若い人に読んでもらうことが一番です」と応援して下さったり、古事記研究の第一人者「本居宣長記念館」の館長さんや研究員の方からは「良い本を書いて下さってありがとうございます」というお言葉を頂き、うれしく思っています。

第七刷を増版するにあたって、五年のあいだに学んだことを加筆して改訂させて頂く事になりました。これまでお世話になった多くの皆さまに、この紙上をお借りして心からの感謝を捧げたいと思います。本当にありがとうございます。これからも真心をもつて、日本中に『古事記』を広めていきたいと思っています。それが私たちの使命だと感じています。

現在私たちは、各地で講演会・「古事記を楽しむ会」という勉強会・クルーズ船での講演・FMラジオなどにも出演させていただけるまでに成長することができました。至らない私たちですが、これからもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

二十刷り改訂にあたつて

宮崎みどり

(二〇一九年令和元年五月)

一九九九年四月二十七日(孫娘の誕生日) 無我夢中で『古事記のものがたり』の本を一冊ずつ手作りした日からもう二十年もの歳月が過ぎました。

いまだに一般書店に本を並べておりませんが二十刷目(六万冊)を改定増版させて頂けることになりました。

ネット社会の普及に伴い、本離れ・出版不況の中でこの六万冊という数字はある意味で自費出版の奇跡だと評価して下さる方もいます。

この度、出版当初から蔭になり日向になつて応援して下さっている桐生敏明氏のアイディアのおかげで、主人の晴明が描いた神さまのイラスト画を三十三枚挿入し、記念すべき二十刷増版号を改訂増版する事になりました。

二十年前を振り返ってみれば、『古事記』というフレーズさえも判つてもらえなくて、「ホームレスの研究をされているのですか?」

と真顔で尋ねられたことが今では笑い話になりました。

古事記のものがたりを気に入ってくださって口コミやボランティアで広めてくださつた多くの方々のご厚意と、ご理解くださつて社頭で本を頒布して下さっている多くの神社さまや個人商店さまのご協力に心よりの感謝を申し上げます。

ありがとうございます。

神話を忘れた民族は滅びます。

お願いです古事記を伝えていってくださいね。(阿礼)

改訂にあたって

小林晴明

(二〇一九年令和元年五月)

二十年あつという間だったなあ。いやになってくる。もう還暦だ。せつかく覚えてきたことも忘れそうだし、漢字なんかもあれっ？とおもったまま書けない……。

すると、『古事記を楽しむ会』の生徒さんが、「横棒ひいて…、点々をその下に書いて…」などとやいやいと教えて頂けるまでになった。とほほ。

『古事記のものがたり』を書いて、日本のことを学んでよかつなあ、うれしかったなあと思ったことは、豪華客船、「につぼん丸」と「パシフィックビーナス」に講師として乗船できたこと。イザナギとイザナミの産んだ日本列島を何周も周ることが出来た。無料だし、船内を楽しんで、お金も頂いて、おいしい料理も食べてと言うことなし。そのうえ、講演はみどりさんがほとんどしゃべってくれるしね。船上のデッキランチも最高でした。それもこれも今は天国に召されたクルーズプロデューサーのホーリー（堀川さん）のおかげでした。この場を借りて「ありがとう。ホーリー」

それともう一つは、八百万の神さまの姿をイラスト化出来たことかな。神さまの姿を、人間と妖精のような抽象的に彩ったユニークなイラスト。独創的なぼくの世界。二〇一七年五月と一〇月。二〇一九年四月。二〇一九年十一月と個展も開催できた。本当にうれしい。

古事記には、人は皆、使命を持って生まれてきている。良い言葉を使えば幸せになる。

自然そのものに神が宿っている。生活習慣の中に神話が息づいている、という素晴らし
いことが書かれているのでぜひこの本を読んでください。

最後になりましたが、『古事記を楽しむ会』に来て、僕たち二人を支えて下さってい
る八百万のみなさん本当に本当にありがとうございます。

参考文献

- 新潮日本古典集成『古事記』 1979
『古事記』 日本国民文学全集1 河出書房新社 1959
橋本治著 『古事記』 講談社 1993
楠山正雄著 日本の神話と十大昔話 講談社学術文庫 1983
大歳礼恵・藤田直子著 日本のくに物語 文化サークルみすまる会 1983
くもんのまんが古典文学館『古事記』くもん出版 1990
出雲井 晶著 新・わかりやすい日本の神話 光琳社出版 1996
田辺聖子著 『古事記』 集英社文庫 1996
石川純著 新訳古事記 ちくま文庫 1991
図説日本の古典『古事記』 集英社 1978
日本の古典『古事記』 世界文化社 1974
戸部民夫著 八百万の神々 日本の神霊たちのプロフィール 新紀元社 1997
辻村三著 『古事記』 神代の巻解説書2 名古屋『古事記』研究会 1982



(沖縄・久高島にて)

現在二人で、大阪（阿部王子神社 / 枚岡神社 / 御幸森天神宮 / 美具久留御魂神社）にて
勉強会「古事記を楽しむ会」を主催。
豪華客船「にっぽん丸」日本一周クルーズ船内や日本各地で講演し、『古事記研究家』として活躍している。

小林晴明（せいめい）

兵庫県丹波篠山生まれ。大阪文学学校にて小説、詩を学ぶ。環境雑誌「グローバルマインド」の編集部を経て独立。「いい話の新聞社」記者、携帯電話コンテンツに「晴明様の恋のおみくじ」「寺社仏閣案内サイト」を製作。おとぎ話やファンタジーなどの得意ジャンルを生かし、難解な『古事記』をより豊かなものがたり性に富んだストーリーに仕上げることに成功。1999年、サン・グリーン出版を設立し、共著「古事記のものがたり」を出版。

宮崎みどり

岡山県和氣郡生まれ。関西外国語短期大学卒業。大阪文学学校にて小説、詩を学ぶ。「いい話の新聞社」編集部を経てフリーランスのライターとなる。経済産業省（日本の伝統工芸）ウェブ版、大阪市福祉協議会発行誌「コンボ」、旅行雑誌「マップルマガジン」、その他インターネット環境サイトにも執筆。百人一首、万葉集、日本の古典文学や古神道などの知識を深めるうちに『古事記』との不思議なご縁が結ばれることに…。

古事記のものがたり

稗田の阿礼が語る ゆかいな日本の神話

（無断転載・複写を禁ず）

1999年10月24日（満月）第1刷発行
2019年令和元年5月吉日 第20刷発行
（総ルビ入り）

著者	小林晴明・宮崎みどり
本文イラスト	荒木尚美・小林あきら
装丁	仁井谷伴子
発行所	サン・グリーン出版
発行者	小林 明
〒 585-0005	大阪府南河内郡河南町大宝1丁目22-3
TEL	0721-90-3669
FAX	0721-74-5525
Eメール	izanami@mbv.biglobe.ne.jp
ホームページ	http://www.5c.biglobe.ne.jp/~izanami/
組版	編集工房D E P
印刷製本	株式会社モリモト印刷

この本は書店では販売しておりません。
ご注文をお待ちしています。
（1,600円・税別）

©SEIMEI KOBAYASHI・MIDORI MIYAZAKI 2019 Printed in Japan

ISBN978-4-921153-00-7 C0093 ¥1600E